

2011年度報告集 第4分冊

雑誌名	東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査報告集
発行年	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/53899

東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査

2011年度報告集

(第4分冊)

宮城県地域文化遺産復興プロジェクト

平成23年度文化庁（「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」）

東北大学東北アジア研究センター

2012

東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査

2011 年度報告集

(第 4 分冊)

宮城県地域文化遺産復興プロジェクト
(平成 23 年度文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」)

東北大学東北アジア研究センター
2012

目次（第4分冊）

J 松島町手樽地区

J-0. 地区概要	133
J-1. 報告	134
J-2. 報告	136
J-3. 報告	138
J-4. 報告	142

K 東松島市宮戸月浜

K-0. 地区概要	145
K-1. 報告	146
K-2. 報告	148
K-3. 報告	151
K-4. 報告	154
K-5. 報告	157
K-6. 報告	161
K-7. 報告	164
K-8. 報告	167
K-9. 報告	169

L 東松島市鳴瀬浜市地区

L-0. 地区概要	173
L-1. 報告	174
L-2. 報告	177
L-3. 報告	180
L-4. 報告	186

M 東松島市矢本大曲浜地区

M-0. 地区概要	189
M-1. 報告	190

全体目次

第1分冊

謝辞	1
1. 序	2
2. 調査資料	
A 山元町坂元中浜地区	11
B 山元町高瀬笠野地区	29

第2分冊

C 岩沼市寺島地区	37
D 名取市北釜地区	49
E 名取市閑上地区	67

第3分冊

F 仙台市若林区荒浜地区	77
G 多賀城市八幡地区	81
H 塩竈市浦戸寒風沢地区	115
I 七ヶ浜町吉田浜・花渚浜地区	123

第4分冊

J 松島町手樽地区	133
K 東松島市宮戸月浜地区	145
L 東松島市鳴瀬浜市地区	173
M 東松島市矢本大曲浜地区	189

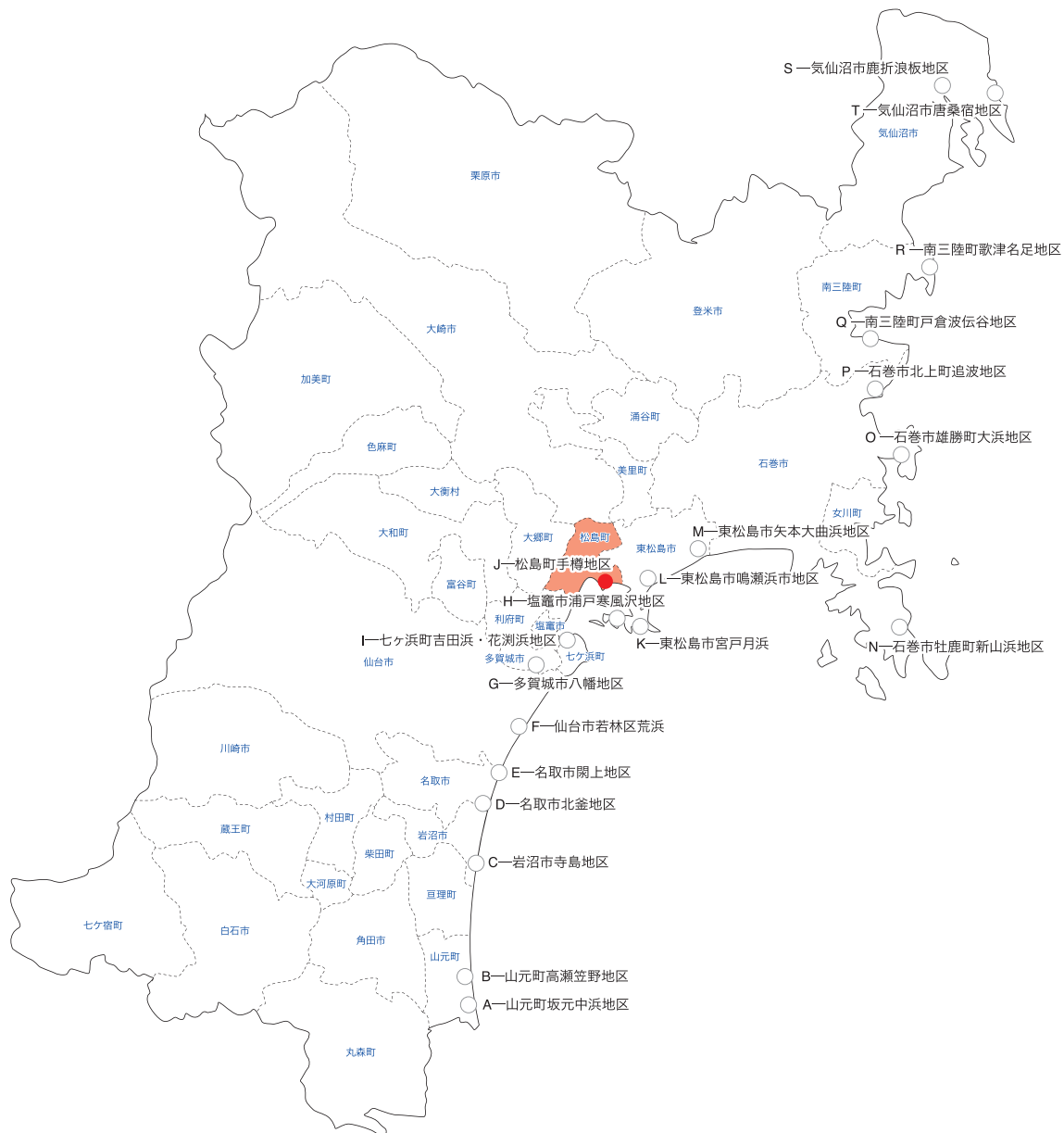
第5分冊

N 石巻市牡鹿町新山浜地区	195
O 石巻市雄勝町大浜地区	219
P 石巻市北上町追波地区	225
Q 南三陸町戸倉波伝谷地区	229
R 南三陸町歌津地区概要	247

第6分冊

S 気仙沼市鹿折浪板地区	251
T 地区概要	279
3. あとがき	289

J-0 松島町手樽地区



手樽地区は、松島湾の北部沿岸に位置する。江戸時代の手樽村の範囲で、元手樽、早川、三浦、左坂、古浦、名籠の6集落からなる。現在世帯数はおよそ250弱である。元来多くの集落が松島湾の沿岸集落であったが、江戸時代以来の埋め立てにより内湾が田地化しており、沿岸の集落は古浦、名籠でそれぞれ35戸ほどの世帯数である。

主要な生業は養殖漁業で、カキとノリが中心となっている。農地は元来ほとんど無かったものとみられるが、前記の通り現在は埋め立てが進み、沿岸集落にも田地が広がる。

東日本大震災では、地区のほぼ全戸が津波被災をした。仙台市の復興計画では県道の東側地域が居住禁止地区となっており、内陸側に集団移転が行われる予定である。

東日本大震災では、松島湾内は湾口の島々が防波堤となり沿岸地域を中心に浸水被害を受けたが軽度の被災であった。現住地で復旧の予定である。

J-1 松島町手樽地区

2012年1月13日（金）

報告者名	岡田 浩樹	被調査者生年	生年未確認
調査者名	岡田 浩樹	被調査者属性	① 手樽漁協前組合長、② 不明、③ 現組合長、④ 土井栄作財務、⑤ 不明、⑥ 漁業管理者、手樽漁協全組合員
補助調査者	小山 悠		

被災した際の状況

この浜は人間には被害がなかったが、牡蠣の作業場と牡蠣棚の被害は大きい。地震の時には、ここで作業をしていたが、津波が来るかもしれないということで、浜から離れた。津波は作業場の壁（浜に隣接して建てられている）約1 mまで来て、戸や窓が壊れ、いろいろなものを持って行かれたが、人の被害は少なかった。むしろ、地震と津波の時に、他所に出ていた人の方が危なかったと思う。津波そのものよりも、浜が下がってしまい、堤防も低くなったため、その方が問題である。

また海底のがれき撤去をしないと、危ない。浅い海だけに深刻な問題である。ようやくめぼしいところは撤去したが、まだまだわからないところにあり、また作業場の修理、牡蠣棚をつくる道具などをどうするか、漁協として皆がやる部分もあれば、1人1人の責任で負担しなくてはならないこともあり、今後もここにいる全員が牡蠣養殖を続けていけるかは、わからない。特に年寄りはどうだろうか。

牡蠣養殖

この地区は、現在38戸で、全部が漁業に関わっているわけではない。その中で震災前は13戸が牡蠣養殖を行っていた。震災後、3戸が牡蠣養殖を続けることを断念したので、今は10名が漁業組合員である。今後も全員が続けていけるか不安なところがある。

この付近の海は浅く、浜から2.5 kmのところに牡蠣棚があった。浅い海だということで、以前は海苔養殖、それに浅蜆が主で、魚については特に売るほどのものではない。今は浅蜆は主婦の小遣い稼ぎになっている。50年前から海苔養殖に転じた。

牡蠣の生産量は松島支所で全部管理しているので、これをどう配分するか、漁業管理者が一番「偉く」大変な仕事である。牡蠣は場所によって、成長や質が違い、潮の流れでかたくなったり、身が締まったり、全然違う。そこで3年ごとにくじ引きで漁場を割り当てる。特にこの付近は、浅い海でおおよそ4-5 mくらいを中心に牡蠣棚を作っていたので、津波それ自体は東松島などに比べると小さかったけれども、海の上の方が流されるので、ひどく被害を受けた。この数年「ユレイホヤ」の被害も少なく、順調だったので、打撃は大きい。

漁業組合と相互扶助

漁業組合の総会は3月の第3日曜にする。場所は地区の公民館である。

地区の37戸は皆すべてが漁業に関わっているというのではなく、松島に働きに出たり、農業をやっている者もいる（専門はいないけれども）。牡蠣養殖は基本的にそれぞれが独立しているので、作業も妻とするが、忙しいときは互いに融通してやっている。あるいは、親戚や親しい知り合いが手伝うということもあるが、見ず知らずの者を手間賃を出して雇うことはしない。やりづらい。組合員が少なくなっても、他の地区の人に手伝ってもらったり、手間賃を出し来ってもらうというのは難しいのではないかと。他の組合と一緒にというのもどうか。漁業権についてはいろいろ難しいところがある。津波のせいで、海底の形が変わってしまい、潮の流れも以前と違うので、どの漁場がよいのか、一から考え直さねばならず、漁業管理者はものすごく苦勞するだろう。当面手探りである。

部落と祭礼

37戸の、この部落は3班に分かれている。1月の第4日曜日に新年会をする。その時は皆が公民館に集まり、宴会をする。地区全体の祭りは、熊野神社が春、八坂神社が7月である。



写真1 牡蠣作業場と組合員の皆さん



写真2 屋号によって分担を決める。ただし、厳密には名前やあだ名など屋号と言えないものも混在している。

J-2 松島町幡谷地区

2012 年 1 月 14 日（土）、1 月 16 日（月曜）

報告者名	岡田 浩樹	被調査者生年	生年未確認
調査者名	岡田 浩樹	被調査者属性	松島町文化財保護委員
補助調査者	小山 悠		

＊1月14日は松島町教育委員会から、この地区の概況や本人のプロフィール、話者の紹介などを聞くという主旨で聞き取りをし、あらためて、16日に幡谷地区に関する聞き取りを行った。

被災した際の状況

地震があったときは自宅におり、すぐに家の外に出た後に、家族や知り合いの安否を電話で確認したが、なかなか通じなかった。ひどい揺れであり、物が落ちてきたが、自宅やこの地区にはそれほど被害はなかった。むしろ地崩れが心配で妻にそういう所へ行かないように言った。それと気になったのが、川の堤防である。この上の地区はもともと沼を埋め立てたところで、その先に吉田川があり、そこから水があふれることがある。津波の話は後にニュースで知ったが、船とともに人が津波に押し流されてきたけれども助かったと聞いている。幸いにこの地区は津波の影響はなかった。

もともと自分は教員であったのと、自分はこういう事（松島町の文化財保護委員）をしていたので、松島町の被害については関心がある。上幡谷は被害がなかったが、それでも随分傷んだ家もあると聞いている。こうした資料「東日本大震災における松島町の被害状況等」（平成23年12月9日現在）などの資料を集めている。津波だけでなく、松島の中の方でも家の被害があり、直しきれなくて移る人も出てくるかもしれない。顕著な被害を受けていないにせよ、家屋の修理は高齢化した住民にとっては大きな負担であり、これに対し十分なサポートが欲しいという要望もあった。

＊被害状況が軽微のため、この地区の民俗的な特徴に焦点

部落と周辺の部落

幡谷地区は12の行政区であるが、7地区（部落）からなる。小ヶ谷、細山崎、新田、品井沼1、品井沼2、中通、上幡谷、くぬぎ台。明治10年には60戸、これが大半は伊達さま以来の家であるが、それが現在400戸になったのには、戦後、昭和27年に品井沼の干拓がはじまり、そこに人が移り住んできた。移り住んできたのは、分家の他、大陸からの引き揚げで、その人達はもともとこの地区に縁者がいるのではない。なかなか生活が苦しく、この付近の名産である竹など、いろいろと人手がいるときもあったので、それを手伝いに来て、やっと食べている人もいたように聞いている。

契約講と部落

この地区は松島でも最も古い契約講がある。その記録は講長が持っているが、古いものは明治の最初であり、相澤さんがこれについてまとめたものがある（相澤繁雄「上幡谷契約講の古い記録について」複写）。そういった記録には、今もその子孫がこの地区に残っている。自分の家も含め、この地区の古くからの家は「伊達さま以前」からある。明治まではそれほど住民は変わらなかったが、戦後になって分家したり、外から移り住んでくる人が増えた。契約講の名前は「神風講」である。

上幡谷は契約講がきちんとしている。もともと、古くからの住民 14 戸がひとつの契約講であったが、約 20 年前？新しい住民で作っていた 2 つの契約講と合同し、70 戸程度の契約講になり、現在に至る。まあもともとは行政の末端機構といった役割であるけれども、別に 7 つの部落には行政委員（組長）がいる。そして班、隣組が普段の暮らしでは重要だ。かつては仙台藩のお山ことでヤマモリ（ヤグモリ）を務めた。またカヤ（共有地）は 2 名が当番で行って、茅葺きの茅を刈り、それを講中に分けた。

講の大切な役割は葬式である。記録でも葬式で使う膳や椀などを講長が引き継いで、それを葬式の時に使い、また講中は葬式の時にいろいろとした。

自分が講長だった時に講を「合理化」した。だんだん他所へ引っ越す家も出てきて、過疎化、高齢化でいろいろと問題がでてきた。今は 57 戸、夫婦でいる世帯は 3,000 円、一人暮らしは 1,500 円。総会は部落会に引き続きするので、ほとんど部落会と変わらない。役員手当は役員につく。役員は講中の法事などに行くために、お布施が必要で、3,000 円くらい包むからだ。役員の任期は 2 年間。宴会の道具は 30 人分を持っているが、30 年前に講中で共同の祭壇を購入し、これを使うことで、経費や出費を節約できるようになった。

神社祭祀

神社は、この地区では八幡神社と高城町の村崎神社で、上幡谷地区は八幡神社で春の 6 月 15 日に祭りをする。旗を立てて、総代をはじめとした役員が集まってお酒を飲む。特に部落の皆が集まって神社で何をするということはない。役員が部落の安寧祈願をするだけで、旗を立てる以外に、部落のそれぞれの家で何をするということもなく、宴会のご馳走は最近では仕出し屋からとる。

J-3 松島町根廻地区

2012年1月15日（日）

報告者名	岡田 浩樹	被調査者生年	① 1930年（男）、② 未調査、③ 未調査
調査者名	岡田 浩樹	被調査者属性	① 松島農園経営者、前根廻区長、② 話者①の妻、
補助調査者	小山 悠		③ 話者①の娘

被災した際の状況

地震の時には夫婦と孫娘が3人、家にいた。まず戸が倒れてきて、仏壇が飛んできた。最初の時はよりも、その後の強い余震でどんどん壊れ方がひどくなっている。2階は物が落ちてきてひどい状況。根廻地区では東松島のディサービスに行っていて波に巻き込まれた1人が犠牲になっているが、そのほかは軽い怪我であった。川には近くまでボートが流されてきた。

震災の後に地区から3軒移った。地震で家が全壊、根廻は70数戸、ほとんどが大規模、もしくは半壊、町に申請した。報道は津波が映像に出るのだけど、松島も根廻も家屋が随分壊れている。今、直せなくて家屋を解体する家が出てきている。自衛隊多賀城22連隊がすぐに来たが、海岸部に多くの人数が入っていった。移った家は半壊でも再建を断念した家もある。また全壊した家では他のところに住み、根廻以外に家を建てている人もいるので、いずれ出るのではないか。今から解体する家もあると聞いている。

一段落ついたかということ、これから。うちも家の手直しもこれからしなければならない。茅葺きの家は建て直しに費用がかかる。茅葺きは専門の業者が今回壊滅して、職人もいないので、どうなるかわからない。トタン屋根の3倍くらい費用がかかる。

家と行事

5人家族、夫婦、娘4姉妹、孫娘（姉）独身、孫娘（妹）、妻、大里から混入。22-3歳結婚、結婚57年目。結婚50年の祝いの席をやった。婿取り、長女は婚出、次女が婿取りで家を継ぐ形にした。三女・四女は結婚して塩竈、仙台に住み、孫をあわせると家族は20名近くになる。正月には17名集まって祝いをやった。正月のご馳走づくりは大変だった。乾杯を5回もやった。昔は泊まりがけで来たが、今はその日のうちに帰る。

お年玉も年齢順に並んでもらい、話をしながらあげる。20歳までお年玉。本家（自分）は孫が小学校に入ると、机を外孫含めて孫すべてにプレゼントしてきた。ランドセル、中学校の制服などはそれぞれの家で買う。盆にも集まる。また彼岸の墓参り、お祝い会などもやっている。家族は比較的近く（仙台）なので、週末もよく顔を出す。阿部家のそういうよさを孫の代まで伝えたい。曾祖父は分家だったが、オトメヤマの管理を任された家柄。これは庄屋とは別。自分の代でここに家を建てた。

同族関係

法事、かつてはオオホンケの法事にも必ず出席していたが、今はその下の本家の葬式には行く。葬式においてはホンケが重要な役割を占め、葬式を仕切る。

家の継承はリョウモライの例もある

地域と同族

館山の廻りにどちらかと言えば、散在している。もともと館山には城があったという伝説があり、その麓を廻って山の根っこ（根方）に古くから17軒の家が移り住み、地名の根廻の由来となった。阿部は他の2-3の家（1軒は潰れた）とともにもっとも古くからここに住む。あっちの沢にこっちの沢に数件ずつ家が散らばっているので、集まるのは大変で、老人会などは難儀だ。後根廻（話者の自宅があるところ）と前根廻がまあ中心。話者家は700年前、元祖はどこから来たか不明だが、根廻に移り住んできたという言い伝えがある。大本の本家はオオホンケと呼び、うちは分家の分家で3代前に分かれて約100年たった。

・話者家は平家の落人という言い伝えがある。阿弥陀如来が話者家の守り（注、これは下根廻の神社の本尊でもある点に注意）。根廻りに同族は23戸あり、屋号も櫓場、板が沢などついている。多いときは根廻は86戸、今は70戸の後半くらいだが、5班から構成されている。ここの地区（班）5班は13戸。

家のしきたり

祝い料理は新年には煮魚（ナメタカレイ）、トン汁、ゴボウの煮物、どどく（タラの切り身）あるいはコッパヤネ（干したらがささくれて枝のようになっているから）サメ、酢の物、豆など。

しそ巻きは昔作ったのだが、今はあまり作らない。かつて漬け物は一日1本をめどに100本くらいつけた。古くなった漬け物は鮭の頭と一緒に煮て食べた。味噌、納豆は自家製。豆腐はつくったことがない。

ムラの関係

発展性はないが、まとまって、穏やかな町、同族の数が多く、うまく根廻の全体に広がっているため、話が通じやすい。

生業と労働関係、ムラ

タケノコ：共同販売は県内で2番目、17-8年前

戦前・戦中、戦後の最初からまで共同労働はあったが、むしろ雇いの方が重要。農作業には、相互扶助よりも、年雇いと通いの農民。別の集落から来ていた。手間仕事、お金の高いところに次から次へと移って仕事を変える。これは機械が入る前まで。雇いはそれを専門に仲介する者（業者ではない）。他の村で田植えなどをやった後に時期がずれたタケノコや椎茸作業にきた。年雇いはナガデマ、自宅の敷地の中に住んで農作業を行った。1日だけの場合はヒヤトイ。給金はその時の契約金を払う12月24日に支払い。ナガデマは父親が息子を連れてきてお金を受け取った。

うちの場合は、ナガデマ2人、またいつも来る日雇い。14歳くらいから雇われた。一般に雇い主と雇われ人の関係は悪く、ヒヤトイは長続きしないことが多かった。

タケノコはこの地域の特産で、雇いもそのためであった。最近ではタケノコを共同販売し、これは県内で2番目、17-8年前に奥さんと数名が一緒になってはじめた。

契約講

契約講はかつて全戸86戸の時も全部入っていた。後から来た者も入れるが、共有財産についてはあまり発言権がなかった。戦前には代表は男性の戸主しかいなかったが、戦後は女性も。結婚式に講は関係なく、主に葬式。連絡から納骨まで、また葬儀一切を仕切った。契約講の記録は明治に火事で焼けたため、今は一部しか残っていない。契約講は親戚ではない村人との関わりの中で、もっとも重要な集まり。親戚以外では頼りになる団体である。入会金はなく、移ってきた人には肝煎が入るように言いに行く。

今は葬祭センターに契約講の代表がお悔やみにいくくらいで、講中には長という意味の「講長」はいない。順番に「肝煎」をつとめる。ほぼ一生に一回肝煎があたるが、これは大変な仕事。私は45歳ころ肝煎をやったが幸いに葬式がなくて、楽だった。肝煎は段取りなどすべての仕事がかかる。ある日年に6回あり、あまりに負担が多かったので、肝煎の負担を軽くした。

ただし契約講がいつまでも持つかわからない。戦後ずーっと簡素化してきた。最近では、毎年、2-3名契約講をやめる者が出てきた。最近では総会の時に「やめる」という者まで現れた。その前まではやめる時には酒1升か2升を持ってきたものだが、随分気質も変わってきた。

神社および祭祀とムラの関係

旧暦の9月15日に祭り。祭りは大して大きくない。阿弥陀如来と八幡神社と合祀している。御神輿はない。氏子が前の夜に集まるのは「オヨゴモリ」という。子供はまったく関係ない。祭りには家の主人が行き、ご馳走を持って帰ることもある。普通の町の寄り合いに近い。どちらかと言えば、気楽にいろいろな話をする場であったが、最近はそうではない。初原には天神さまの獅子舞があるそうだ。どんと祭りもやらない。自分の家の氏神さまでどんとを納めている。

若い頃は、他の神社に呼ばれていくことはあるが、後根廻と前根廻のそれぞれに神社があるのだが、あまり交流や一緒にすることはない。前根廻は曹洞宗龍澤寺の監督、観音を祭っている。前で祭りをやっていたとしても呼ばれることは昔も今もない。前根廻の神社の正式な名前はよくわからない（通称「子育て観音」）。ただ、神社は地域の人たちが集まって掃除をしたり守っている。初詣でや七五三は塩竈神社に行く。まずは氏神さまが大事で、地域の氏神はそれほどでもないかもしれない。

村の行事

春の彼岸、祝い会、盆踊り。盆は根回り分館に集まって盆踊りもやっていたが、ここ数年低調（つまりやらなくなった）盆踊りは相馬盆踊り。

残したい習慣：唄い

残したいのは契約講の集まりなどであるが、難しいのでは。むしろ孫の代に残したいのは大蔵流の唄いを残したい。戦前は青年のひとつのよい趣味であった。家元は阿部家の者へ、6-7 人の若者が集まって、正月から 20 日間夜に毎晩習った。前の晩に習ったものを翌日さらって、新しい節をならった。19 才ころから習った。戦争で中断し、その後はだんだん衰えた。

J-4 松島町名籠地区

2012 年 1 月 28 日（土）、1 月 31 日（火）

報告者名	岡田 浩樹	被調査者生年	① 56 才（男）、② 生年未確認
調査者名	岡田 浩樹	被調査者属性	① 松島市役所職員をやめて 4 年前から蠣養殖。② 話者①の妻、名籠生まれ、育ち。子供は 4 人。松島市役所勤務
補助調査者	岡山 卓矢		

被災した際の状況

今年度の蠣の準備（蠣棚の下準備）がほぼ終わり、蠣処理場で作業が終わり、いよいよ解散というときに起きた。その時は堤防のところにいた。まず地震の時は地鳴りがすざましく、まわり中、「ごうー」という音がした。老朽化した作業場にいたので近所のおばちゃんを連れて、蠣処理場のコンクリートの壁際に逃げた。作業場が崩れてもいいように。津波に関する言い伝えはない。自宅もかなり壊れた。塗り壁が全部落ちたし、床も抜けて、隙間だらけになった。家は倒れないだけ、半壊。

名籠では全壊の家屋はないが、津波ではなく、堤防が破れて、波が何度も入り込んできて全壊状況になった家がある。ただし、これは地震のための全壊とは言えない。堤防はまだ破れたまま、すごい勢いで水が流れ込んできて、また潮の満ち引きで出入りするので、ゆっくりだめになっていく。津波と言うより、その後の地盤沈下の方が問題である。

奥さんは市役所で勤務中で、そのまま市役所の 3 階に泊まった。川が増水してすごい流れで逆流している様子が見えた。携帯も通じないので、心配になっても、もう家は流されたと思い心配になって無理に戻った。堤防の所から流れ込んできた海水で車が動かなくなった。村人は村の入り口の公会堂に 40 名近く逃げ込んだ。昼は家に戻り、夜は公会堂で寝泊まりした。この村自体には被害者はいなかったが、親戚がやられた人が結構いる。

震災前は蠣棚が 30 棚ほどあった。震災の時は蠣の収穫が終わり、蠣棚の準備が終わったところ。自分は 4 日前に 900 本の刺し竹をしたところだった。この付近は堤防は 3 m 12 cm だか、その堤防を越えて津波はこなかった。ただし作業場は地震で壊れた。地盤沈下が 60 cm ほどで、それが深刻。刺し竹が根元から折れてしまっていた。海底には 10 cm ほど刺してあるのだが、泥と水の境目で折れてしまった。それくらい水の勢いが強かったようだ。船は流されて、見つかったのだけどエンジンがなくなった。今、漁業を続けるかどうかまよっている。父親（80 歳）はまだ元気で、息子が蠣養殖を継ぐ気になったところで今回の震災があり、お金の問題よりも、自分としては気力がわからない。息子に継がせると言っても、強く勧めることができる仕事ではない。

海底のヘドロはほとんどなくなったところ（比較的深い所）もあったが、逆に松島の海底そのものが沈下しているのでは。今までの竹ではもう短い。このため、蠣棚の場所もどこがいいかわからなくなり、漁場の配分も一から考え直さなくてはならないだろう。まだ海底にがれき（ほと

んどは他所から流れてきた)があつて、船を怖くて走らすことができないので神経を使う。

作った仮殖棚(堤防のすぐそば)はすべてやられた。蠣には保険がない。田んぼには保証があるが海にはなにもない。今回は蠣の棚はたっていたが、蠣を植え付けたのではないで、保証がない。もし植えていたら、5年間の売り上げから保証金が出るのだが、仮殖棚には出ない。

蠣にはロープが巻き付いているので、竹と分けて、竹だけ燃やさないといけなく、その手間も大きい。瓦礫は野蒜の方からきたものが多いようだ。

この付近は浅蜷の産地だったが衰えた。30年前くらいから蠣の殻を粉碎したものを海にいれ、稚貝を知多半島から買ってきて入れて少しずつ増やしてきた。それも今回の津波で全部流された。

蠣の棚

この付近の蠣は1年サイクル(広島は2年サイクル)。

1間に31本刺し竹、左右に渡して62本、その間に渡し竹、これに1間に5本30本吊す、600本(連)となる。これが一棚。各自の労力に応じて棚の数は異なるが、棚一つあたりに「行使料」がかかる。単位漁協にかかる。

蠣棚は2年間続けて同じ場所を使うが、3年目にくじ引きで配分する。場所によって、蠣の育ちや作業のしやすさが異なり、収入が大きく違う。この場所はこれまでの経験や実績で決まるのだが、今回の震災で、まったく1から考えねばならない。こうした培った智恵や経験の価値が失われたのも本当に痛い。

1棚をつくるには、1本800円で62本、垂木(張りこ)が300円が31本、渡し竹が1列5本の4列で20本で、ロープ、釘、穴を開ける手間作業などで15万~20万程度。

竹は近くで調達する。自分で竹を作っている人もいる。

種蠣は仮植棚で育て、その後宮戸で養生した後に9月より収穫に入る。宮戸は別の漁協の管轄なので、使用料を払う。

蠣養殖の担い手と現状

蠣養殖しているのはうちがもっとも若い方で、他はほとんど70代。村は全部で40戸で、そのうち漁業権もっているのが18戸、うち蠣をしているのが14戸。漁業をしていない家は主に農業と松島につとめに行っている。この地域は漁業と農業が半々。災害の時にはやはり政策面や組織でも農協などがあり、頼りになるが、漁協は小さい。

この付近の蠣棚は広島の方と違って、海底が浅いので、蠣棚を浮かせると言うより、海底に直接刺し竹を刺すことになる。

奥さんは松島の山の方生まれなので蠣向きはしない。主に村で、むしろ農業だけの家の奥さんなんかは手間賃稼ぎに手伝う場合もある。

蠣は仮殖棚から、沖合の方に他の漁協に借り賃を払い、育てる。9月から1月末までが蠣向き。9月までは主に農業。蠣は5ヶ月くらいしかできないので、蠣だけで食っていくことは難しい。農業やつとめと複合的にやらないと食っていけない。経営規模が小さい。年寄りが年金もらって、年金と同じくらいの稼ぎ程度でやっている年寄りがほとんど。

海苔養殖

この付近は、かつて海苔を40年前までやっていたけども、水質のせいか衰えた。この付近も含めて本場だった。ただし、海苔は細い竹を使い、本数も多い上に、人手と何よりも乾燥させる施設（昔は自然に干していた）とその運転資金がかかり、蠣よりも資金がいる。また作業も集中的にしなければならず、蠣剥きよりも海苔の方が大変。それで海苔の値段が暴落したことをきっかけに下火になった。

農業

この付近でもナガヤトイがあった（このほか農業についての聞き取り。特に椎茸栽培について）。

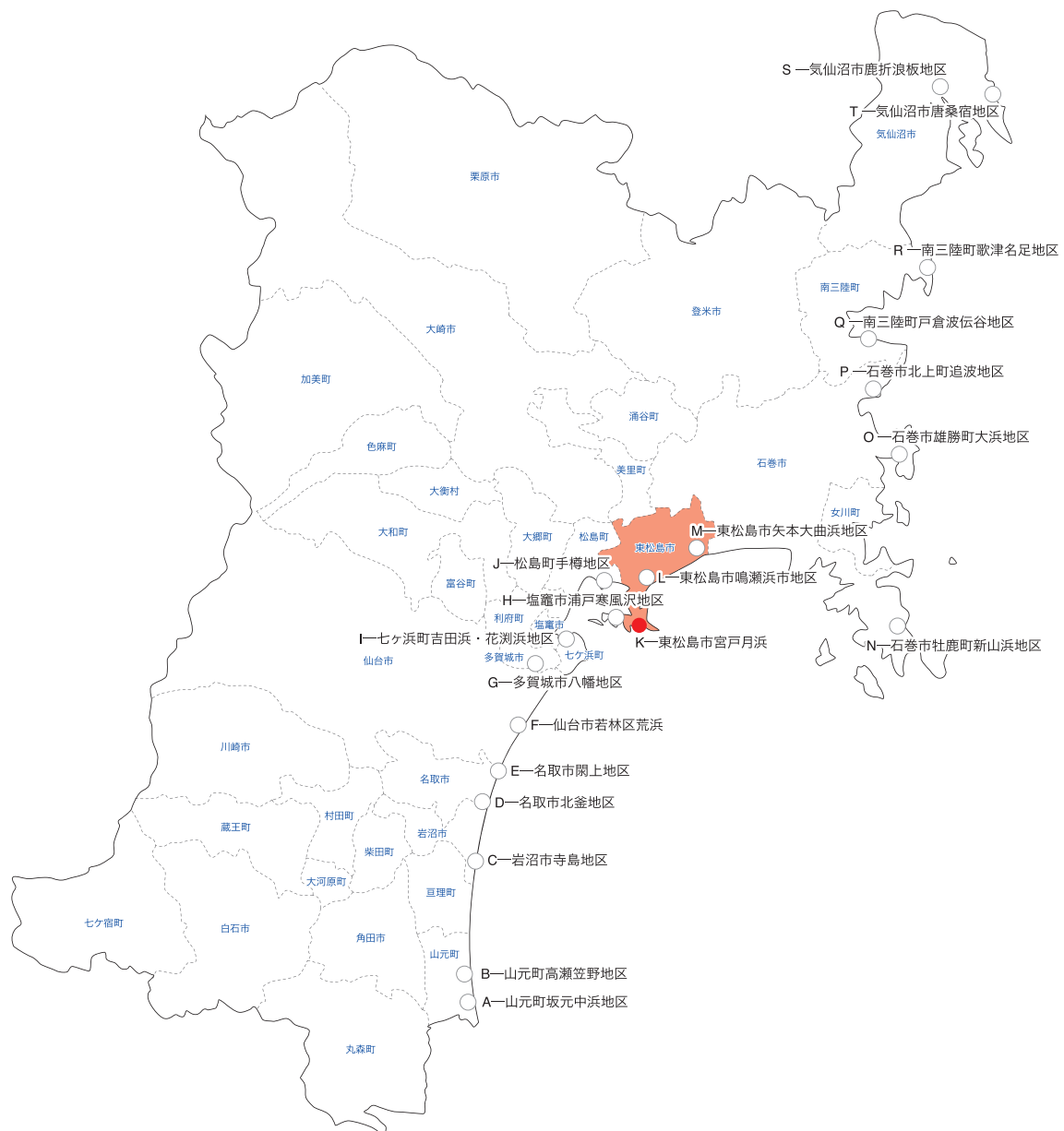
信仰と年中行事

この村はいくつかの寺の檀家になっている。契約講はあるが、主に葬式。そのほかに観音講（女性だけ）や馬頭講などもあるが、それは希望者だけで、村全体ではない。

八坂神社（名籠）で氏子が前日にオヨゴモリをするが、1日限り。

自分は公務員をしていたので、村の総会や祭りについては、まあ、これからやっていかねばならないから、そういうこと祭礼については、他のよく知っている人に聞いてもらった方がよいので、次の機会に紹介する。私の知っている話はだいたいなので……まあ、これは参考程度に（本人の希望もあり、この部分は割愛する）。

K-0 東松島市宮戸月浜



月浜は松島湾の北端に位置する宮戸島の一集落である。戸数は約 40 戸ほどで、外洋に面した入り江に集まっていた。江戸時代は宮戸島全体で、宮戸浜として一村を構成し、月浜はそのうちの一字となる。

主要な生業は、漁業で、ノリ、カキの養殖を中心に、刺し網漁、小規模定置網漁などの沿岸漁業を営んでいる。また、月浜の海岸は海水浴場になっており、民宿を営む家も多い。

地区内には五十鈴神社があり鎮守となっている。月浜では、えんずのわりと呼ばれる小正月行事を行っている。小学生から中学生の男子が 5 日間の籠もりを行った後、集落内の家々を訪問し鳥追いの歌を唄う行事で、重要無形民俗文化財に指定されている。

東日本大震災では、地区のほぼ全戸が津波の被災を受け流出した。東松島市の復興計画では高台に集団移転が行われる予定である。

K-1 東松島市宮戸月浜

2011 年 12 月 10 日（土）

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1964 年（男）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	飲食業（震災前は海苔養殖業）
補助調査者	大沼 知		

自身の境遇と震災後の転身について

話者は石巻から月浜に婿に來た。月浜では海苔養殖と、海の家・売店の経営をしていた。津波で海苔養殖の設備等がすべて流されたため、養殖を続けることを諦め、6月からラーメン屋台の経営を始めた。震災を機会に復興したい（新しいことをしたい）と思って始めたのだが、今は瓦礫の撤去をしていた方が良かったかとも感じている。屋台の売り上げは、一日1万～1万5千円程度。そのうち6割ほどが利益になるという。

宮戸島には4つの浜（区）があり、漁業に関しては宮戸漁協（大浜・室浜）と宮戸西部漁協（里浜・月浜）の2つの組織に分かれている。瓦礫の撤去は漁協単位で組織されており、月に25万ほどの収入になると聞いているという。

ラーメン屋台を始めた当初は、被災を逃れた自製の海苔を使ったラーメンが売りで、テレビ等でもたびたび報道されたが、今は当初考えていたほど商売が上手くいかないという感が強い。また、これまでの暖かい時期は良かったが、寒くなってくると一日中外での立ち仕事になる屋台は体力的にも厳しいと感じるという。グリーンタウンやもとの仮設住宅には飲食店の店舗が入っていると聞き、自分も同様に仮設住宅に店舗を持たせてもらえないかという希望を市に伝えたが、そのような希望は他にもたくさんあるという。現在は、普段は奥松島縄文村歴史資料館前に屋台を出しており、休日の昼には月浜などの仮設住宅に行き店を開いている。ボランティアの炊き出しがあると売り上げにならないので、その情報を聞いて店を出す場所を考えている。店ののれんは、最近、ボランティアの人たちが作ってくれたという。

海苔養殖を諦めたことについて

震災以前から、海苔養殖はあまり長く続けられないと思っていた。近年は利益も芳しくなかった。事業を拡大するには、新しい乾燥機等の設備投資が必要になるが、個人の事業主では国の補助金などを得るのが難しく、行き詰まりを感じていた。

月浜の海苔養殖業者で共業化する話があるが、これだと通年雇用の給料制になるので、つまらないと感じたという。以前の業態だと、秋から春の間は海苔養殖に従事し、夏の間は海の家を経営するなど、ある程度好きなことができた。震災を機に、共業化の話も本格的になってきたので、これを機会に転身を決めた。月浜の海苔養殖業者で、共業化に参加しないことを決めたのは、話者が唯一である。

しかし新たにラーメン屋台を始めても、同様に個人の事業主には補助金が得られないことを不

満に思っている。補助を受けるためには組合などを作らなければならない。



写真 話者のラーメン屋台の営業の様子

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1972 年（男）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	海苔養殖業、民宿経営
補助調査者	大沼 知		

月浜の主要産業について

話者は、海苔養殖業と民宿経営を行っており、これは震災以前の月浜に最もよく見られた生業形態であった。また民宿経営をしている家では、多くが別の複合的な漁業にも従事していたという。以下は、話者の認識による月浜での典型的な漁業形態である。

春：アサリ取り（観光潮干狩り含む）、刺し網、定置網（壺網）

夏：磯漁（男性素潜り、主として鮑）

秋：定置網、海苔の種付け

冬：海苔養殖、刺し網

これらの漁業は、定置網も含めすべて小規模で、基本的に個人または家族（＝民宿）で営んでいた。網漁も、とくに特定の魚種を狙うということはなく、季節ごとに入る魚を捕っており、その大半は民宿で宿泊客に供される。漁獲を販売する場合も、少量なので漁協を通さず、直接市場に持っていく場合が多かったという。小遣い稼ぎ程度のものと認識されていた。

民宿経営は夏が稼ぎ時で、海水浴客のほか、学校単位の海洋体験学習の受け入れで安定した客数を確保していた。その他の季節でも、地域の契約講等の団体旅行が、毎年特定の日に来ていたという。こうした事情から、家族経営であっても、一日に少なくとも 40 名ほどが宿泊でき、宴会を開くための大部屋をもつ民宿の規模が保たれていた。

海苔養殖の協業化について

海苔養殖の共業化については、震災以前から、月浜でも 2 軒の養殖家が里浜の 5 軒と共同で操業していた。この 2 軒以外に月浜には 8 軒の海苔養殖業があり、そのうち 7 軒で協業化の計画を進めている。すでに新しい工場 2 棟の建設予定地も決まっているという（現在、仮設住宅が設営されている区画から、さらに大浜寄りの場所が建設予定地）。

現在の（宮戸西部漁協の）組合長が海苔業者ではないので、共業化に関して、会議に出席したり、情報収集をするなど、積極的な動きをしてくれなかった。そのため、月浜の海苔養殖の共業化は出遅れたと感じているという。

話者自身は、数年前に、海苔乾燥機等を 4,000 万円ほどかけて新調したばかりだったが、今回の津波で流されてしまった。それでも人的被害が出なかったのだから幸せだったと思っているという。しかし、これから再度個人で設備を整えると、その数倍の金がかかるはずで、それだけの融資を個人が銀行から受けることはもう難しい。したがって、海苔養殖を再開するには、共業化

以外に道はないと考えられた。

震災後の民宿経営について

月浜の集落地（地元の人はハマと呼ぶ）は、全戸が津波の被害を受けたことから、今後居住地としては利用できなくなり、集団移転が検討されている（この話を聞いた時点では、調査者はまだそのことを知らなかった。その詳細は、翌日の月浜区長との面談で知った）。しかし新しい居住地は、限られた宅地を希望者に均等に配分するため、震災以前の民宿の規模を保つことはほぼ不可能になる。話者は、規模を縮小し、10名程度を最大定員とする自宅兼民宿として再開することを考えているという。ただしこの規模で経営の採算がとれるのかは未知であり、話者の父は、自宅とは別に民宿の用地を確保して、従来の規模で再開したいという希望をもっているという。

来年のえんずのわり行事の実施について

月浜に伝承される小正月の鳥追い行事である「えんずのわり」は、平成18年に国の重要無形民俗文化財に指定された。近年は、月浜在住の小学生・中学生男子が参加して行ってきたが、今年中学3年生だった1名が抜け、次の参加者は総勢3名となる。そのうち大将（参加者中最年長の者）となる小学5年生を含む2名が話者の息子である。

震災で深刻な被害を受けたにも関わらず、来年1月の行事を行うことはすでに決定しており、調査日には山に入って松の枝を切り、五十鈴神社の境内で、行事に使う神木（マツノキと呼ぶ）を作っていた。話者は、息子たちが参加するのでそれに付き従っていた。また、今年の大将役であった高校1年生が手伝いで参加していた。

今度のえんずのわりをやると言い出したのは子どもたち自身であるという。現在、行事の舞台となる神社や、その傍らにある岩屋の整備を行っている。ただし近年は、行事の期間中、子どもたちは岩屋で食事を取り、神社の境内に寝泊まりしていたが、今度はそれは無理である。またえんずのわりの行事の中心である、子どもたちによる集落の家回りも、家屋のほぼ全てが津波で流されたので不可能である。どのように行事を実施するかは保存会が決めることで、話者は知らないという。月浜の仮設住宅の中でお籠もりをするのだろうが、家回りは仮設住宅内を回ればよいというほど単純ではない。月浜の仮設には近隣の別集落の人々も入居しているし、月浜の住民でも別の場所に住んでいる者もある。話者の家族も宮戸小学校の仮設住宅に入居している。さらに、集落の家回りは回る順番も定まっていたが、仮設で回る順番をどうするかの問題もある。

なお、話者は月浜の仮設に親戚がいるので、当日（14日の晩）はそこに行って拜んでもらうつもりだという。

宮戸小学校の統合問題

話者は現在、宮戸小学校のPTA会長をしている。震災後も、学校に通う2人の子どものことを考え、月浜の仮設住宅ではなく宮戸小の仮設に入居することを決めた（宮戸小仮設に入居しているのは、月浜からは話者の家族のみ）。今年度、宮戸小は全校で29名。震災後、学校統合の話が出ているという。統合は野蒜小学校とになるだろうが、野蒜小は震災で大きな被害を受けているのでどうなるか心配している。また、学校が統合されると、小学生が下校後にお籠もりを行

っているえんずのわりの実施にも影響が出ることが懸念されている。

K-3 東松島市宮戸月浜 2011年12月11日・12日（日・月）

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1949年（男）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	えんずのわり保存会長、民宿経営
補助調査者	大沼 知		

話者自身と五十鈴神社について

話者は、「かみの家」という民宿を営んでいる。民宿かみの家は高台にあったため、今回の震災でもあまり被害を受けず、震災直後は一部の住民が避難していた。調査時も民宿として営業していた。ただし浜にあった自宅は全壊しており、調査時も話者の家族は民宿に起居していた。自宅に同居していた息子家族は月浜の仮設住宅に入居していた。

かみの家とは話者家の屋号であり、「神の家」の意であるという。月浜の鎮守である五十鈴神社の永年総代長を務めている。これは五十鈴神社（地元ではシンメイサンと呼ばれる）がもとは話者家の個人所有の神社であり、後に月浜区に寄付されたものだからという。いつから月浜の鎮守とされたかは明らかではない。境内の碑には社殿が昭和17年に築造されたことが書かれており（現在の社殿は昭和55年に改築）、昭和23年には話者家から宮城県神社庁に用地ごと寄付されたという。

話者家は元は塩竈神社の宮司家の出身と伝えられ、月浜に移って宗教者として活動していたのではないかと勝見氏は考えている。ただし記録はなく、月浜の開村以来の墓地とされる場所も今は荒廃しており、その出自を確認することはできない。しかし今でも神社の世話はかみの家で行うことが、区の住民にも広く認められている。五十鈴神社の旧暦3月18日の例祭には、前夜に幟を立て、ヨゴモリと称して地区の役員らを集めて直会をしている。当日は東名の塩竈神社の宮司が来て祭典を行う。また12月18日を神社の正月といい、地区の人びとが参拝に来るので、その前日17日に注連縄を作って神社に供える。こうした世話は基本的にかみの家の当主が中心になって行くとされる。

えんずのわり保存会とその活動について

月浜のえんずのわりは昭和61年に旧鳴瀬町の、平成5年に宮城県の、そして平成17年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けている。保存会は昭和62年1月に、町指定を受けたことで鳴瀬町文化協会に加盟を打診され、それを機会に発足した。なお、この保存会の発足に際して「えんずのわり」という呼称を正式に採用したのだという。それまでは地元でも色々な呼び方で行事を呼んでいたという。保存会長は、発会以来ずっと話者が務めている。

保存会としての独自の活動は、行事の実施以外にはほとんどない。役員は会長・副会長・会計が各1名で、監事が2名となっている。毎年の行事の実施についてはこの保存会役員が中心になって働く。発会当初より区の住民全てが保存会の会員であるとされているが、保存会役員以外

の住民には、「保存会」といえば役員、とくに会長である話者のことであると認識されているようであった。

会計は実質的に区の管理に任されており、保存会としての会計処理はほとんど行っていない。県からの補助金は区の会計に組み入れられ、必要な費用を区から負担してもらうという形態をとっている。町の文化財として岩屋の補修を依頼した時も、県の文化財となって毎年の補助金がもらえるようになって、その申請はすべて（保存会ではなく）月浜区として行ってきた。会の規約も従来は持っておらず、近年「ふるさと文化再興事業」で映像記録作成をすることになってはじめて保存会規約を作り、補助金を受けとるために保存会名の銀行口座を開設したという。

毎年の行事の実施以外には、1月21日と8月21日の伊勢講（区の総会）に事業報告をするくらいであった。

来年のえんずのわりの実施に関して

来年のえんずのわりの実施に関しては、まず8月21日の伊勢講で、実施するか否かの話題が出た。その時点では、子どもたちはやる気満々であったが、親たちが心配をしていた。とくに浜の家がすべて無くなり、近くに人もおらず、街灯もない中で神社や岩屋に子どもだけでお籠もりをすることの危険性や、お籠もりの最中に地震や津波が来る可能性が取りざたされた。

話者は、保存会長として市や県の文化財担当の意見も聞いた。どちらも、できることなら休まず継続してもらいたいという意見だった。震災直前まで、雨漏りがしていた岩屋の補修を文化庁の補助金でお願いしようという話があった。その話は震災で流れてしまったが、もし補助金をもらうのであれば継続するのが前提であると考えられていた。話者自身は個人的意見としても、国の無形民俗文化財にまでなっているのだから、途絶えることなく実施した方がよいと考えていたという。

やがて親たちからも、長い伝統文化を自分たちの代でストップしたのでは忍びないという話が出てきて、9月の末頃までには、形はどうあれ実施するということを保存会で決めた。10月始めには、そのために神社の鳥居の補修について仙台の大崎八幡宮の宮司と相談した。最終的に、11月23日に、区で来年の行事の実施を決定した。

ただしどのようなやり方で実施するかは、現在保存会で検討中である。話者の案としては、お籠もりについては、岩屋で食事をし、その後、仮設住宅の談話室に宿泊するというかたちを考えている。家回りについては、月浜の仮設住宅の中を回ることになるだろうが、順番などはまだ決定していない。月浜の仮設以外にいる人は、希望するのであれば、仮設の談話室なり公民館なりに来てもらって拝んでもらうことを考えている。明後日（13日、後で14日に変更になった）に神社の正月用の注連縄を、仮設の談話室で作るので、そのときに相談して、えんずのわり保存会の役員や地区の役員らと協議して決定するつもりであるという。

なお、震災とは無関係だが、来年の行事から参加者する子どもの年齢を、従来の中学生までから高校生まで引き上げることが決まっている。これは、今年度最年長だった中学3年生が卒業し、次の年長者（一番大将役）が一気に小学5年生まで下がってしまうことに配慮してである。ただし高校生の場合、通学や部活動、受験勉強などの事情で部分的にしか行事に参加できない。また、これまでも高校生が子どもたちの後見役として家回りに付き随っていたこともあり、行事の

主体が中学生までの子どもであることは従来と変わりはない。しかし高校生を正式に参加者とすることで、ご祝儀の配分を受けることができるようになる。これによって行事への参加のモチベーションを高めようという意図がある。

月浜の年齢階梯組織

えんずのわりは子どもが主体となる行事であることは間違いないが、その参加年齢は近年だけでも頻繁に変わっている。話者によると、記憶にある限りの最初は 11 才までの参加であったという。その後、中学 2 年生まで、中学 3 年生までと変更され、来年度からは上述の通り高校 3 年生まで上限を引き上げる。言うまでもなくこれは、参加資格をもつ子どもの絶対数の減少に対応したものである

月浜においては、このような子どもの組織は、えんずのわりという行事の時だけ顕在する社会関係である。えんずのわりに参加する子どもの集団を示す言葉もとくに地元にはないという。ただし、かつては子どもが夜番として部落を回るという慣習があったという。

なお、三崎一夫の論文「月浜の年序組織とエズノワル」（『東北民俗』10、1976 年）ではえんずのわりの参加主体を天神講とし、これを子ども組として扱っているが、話者の認識では、天神講は子どもの組織ではなく、えんずのわりとも無関係であるという。

一方、かつては月浜にも青年団があり、活発に活動していた。神社の祭礼のヨゴモリのときには芸能を出すのが習わしで、自分たちで三度笠の踊りなどを習い踊った。海水浴のシーズンには浜を清掃し、浜にテントを張っている観光客から 300 円ずつ徴収した。潮干狩りの時期には観光客に券を売った。それらを資金にして、青年団で海苔養殖の研修などを名目とした旅行をした。昭和 50 年代の前半までが全盛だった。やがて祭礼に芸能を出すのをやめ、潮干狩りの権利を組合が管理するようになって収入源が途絶えたため、地区の青年団は自然に消滅していき、組合（漁協）の青年部の活動にシフトしていった。青年団に規約はとくになかった。成員は、下は中学卒業以上で、とくに上限はなかった。だいたい 35 才くらいで退団した。漁協青年部は 40 才が定年である。

K-4 東松島市宮戸月浜

2011 年 12 月 11 日（日）

報告者名	大沼 知	被調査者生年	1947 年（男）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	月浜区長（震災後の 4 月から）、海苔養殖業
補助調査者	大沼 知		

震災後の世帯動向

月浜の仮設住宅は、月浜、室浜、里浜からなっている。月浜から 34 軒（部屋）・談話室 1 部屋・26 世帯、室浜から 3 世帯、里浜から 2 世帯という入所状況になっている。月浜では 7 世帯が松島、矢本、仙台など外部へ居住を移しており、2 世帯が月浜を出て住所変更も行っていることから、もう戻ってくることはないとの見通しである。仮設住宅は 6 人以上の家族であれば、2 部屋使用できる。月浜における家族構成の多くは祖父母夫婦とその息子・娘夫婦の 2 世帯で一族というようになっていて、仮設住宅に入る際は月浜の仮設住宅に祖父母夫婦が入り、息子・娘夫婦は外に出るといったように世帯ごとに分かれて暮らすようになっている家もある。

震災直後の立ち回り

話者自身は地震の直後他地域にいて、地震から 30 分後に月浜に戻ってきていた。その時は神社に 15 ～ 16 人ほどが避難していて、民宿の送迎バスを使ってその人数とともに宮戸小に避難した。津波は地震から約 1 時間後月浜に到達し、20 ～ 30 人が月浜に残っていたが、その人達は津波被害を免れた民宿や倉庫などでその日を過ごした。

震災における対応

月浜には以前から東松島市からの指導で、地区の防災マニュアルがあり、内容は地区での震災時における対応などが決められており、避難が完了しているかの確認を地区の人達が分担して行うことが義務となっている。例として高齢者がいる家で、その家族が仕事で外に出ている家という場合はその高齢者の避難の確認などをするというかたちになっている。この役割を担っているのは防災役員があり、15 名くらいで編成されており、東松島市の消防団幹部は役員になっていて、それに部落の役員も入っている。この機能は今回の震災に関しては必ずしもマニュアル通りではなかったもののしっかりと機能したということである。実際に月浜に津波が到達したのは地震発生から約 1 時間後であったそうで、三陸に津波が到達した情報を得ており、そこから急いで避難を始めたことが月浜において人的被害を出さなかった要因である。

震災後の月浜を含む宮戸島の動き

震災翌日から大浜、室浜、里浜、月浜の四浜の区長が集まって話し合い、朝・夕の一日 2 回毎日今後の動きなどを話し合っていた。当初はその集会の名称はなかったものの、いつからか復

興会議と称するようになった。その会議で話し合われた内容を地区に伝えるために懇談会を月浜ではひらいていた。復興会議はだんだん回数を減らしていき、朝・夕の2回から夕の1回で現在は2週間に1回となっている。復興会議は当初、各浜の区長、区長補佐などの少人数で行われていたが、回数を重ねることで、幅広く意見を取りいれるとのことで、サラリーマン代表、PTA、婦人部代表や海苔組合といった組合の代表者なども参加を広げて行われている。その会議とは別に建築業者や大学の先生など外部の人を交えての集団移転の話などをする会もあった。それには地区の役員や若手の人達を中心となって行われていた。市からの要請ではなくあくまでも宮戸島での動きとしてやっていて、中心となっていたのは大浜の区長であった。

震災における生業の変化と宅地移転

話者は以前から海苔養殖を2軒共同でおこなっていたが、月浜において海苔養殖は従来家ごと一軒一軒で行うのが多かった。しかし震災後は共業化して行うという方向であり、月浜内で海苔養殖を行う家で共同で資材購入や種付け、収穫などの作業を行うことになる。里浜においてはすでに海苔養殖は震災前から共業化しており、今年月浜で海苔養殖に携わった2軒の家は里浜の海苔養殖と共業していた。話者は来年から海苔養殖を再開する予定であるが、里浜の方の海苔養殖ではなく、月浜内での共業化の方へ加わるとのことである。

月浜において海苔養殖と並ぶ主要産業に民宿業がある。今後月浜において、従来生活していた浜に建物を建てるには土地の嵩上げや建物1階部分を鉄筋で補強するなど審査が必要で、これをクリアしなければ建物を建てることはできないとのことである。これは国の方針で決定されている。集団移住の候補地とされている月浜地区の横山沿いを整備して作られる土地には一家族あたり与えられる敷地面積は確定されていないもののおよそ80坪前後という予想である。そのため浜に住んでいた頃よりも居住面積は縮小となることから、従来家一軒一軒で行っていた民宿経営は、移転地においてその規模からいくと困難になる、もしくは経営規模の縮小は否めないとのことである。今後浜に何かを建てるのであれば、漁業機具の収容庫などといったものが現実的であるようだ。

震災後の行事について

月浜に伝承されるえんずのわりという行事は小正月の鳥追い行事で、国指定の重要無形民俗文化財である。行事の主な担い手は月浜に住む7～15歳までの男子で、岩屋と呼ばれる祠に籠り、1月14日の晩にマツノキと呼ばれる神木を持って月浜内の全戸を決められた順番に従って、祝福の言葉を述べてまわる。

話者がえんずのわりを行っていたころは、行事に参加する子どもの人数が多く、歳が下の者は岩屋に泊まることなく家に帰って翌朝早くに岩屋に集合することになっていたが、その際に自分の親が岩屋まで同伴して見送られていたことが、恥ずかしくてたまらなかったとの思い出があったという。えんずのわりは親など大人達が口出しするのではなく、子ども達だけで行事を進めていくことで、大人へと成長していくものだと言っていた。行事中に年上である先輩の厳しい接し方や言うことを守ることによって学んでいく奥の深い行事で、これが現在まで続いていることは地域の宝であり今後も続けていってほしいとの願いがある。

これまでえんずのわりは少子化の影響もあり、参加年齢の拡大を図るなどして存続してきたが、震災後は集落が籠る岩屋から遠のいたことによって、子ども達に何かあった場合の援助が遅くなる、宅地移転計画からも本来行事を行っていた場所から遠くなるため、従来の形を残すことが困難であるとの課題がある。

K-5 東松島市宮戸月浜 2012年1月11～16日（水～月）

報告者名	大沼 知	被調査者生年
調査者名	俵木 悟	被調査者属性
補助調査者	大沼 知	

平成24年のえんずのわりの参加学年とその変遷

平成24年のえんずのわりは小学5年生を最年長とし、小学5年生1人（大将）、4年生1人（副大将）、3年生1人（三番大将）の計3人で行われた。平成23年までは参加学年が小学2年生から中学3年生までであったが、平成24年においては小学1年生から高校3年生までの拡大がなされた。参加学年の拡大の議案は震災以前から挙がっており、理由は平成24年のえんずのわりが小学生だけとなり人数も少ないため、行事を行うことが困難なのではないかという懸念があったためである。そのような中で、3月の震災があり、行事そのものを行なえるかどうか不明という状況になった。しかし夏ころに保存会と小学生とその保護者を交えて話し合いをしたところ、子ども達から「今年もえんずのわりをやりたい」という声があがり、平成24年も行事を行うことが決定した。

そこで、行事を続けるにあたり、参加学年の拡大をおこなうために、10月に保存会、地区役員、保護者などを交えて行った会議にて、参加学年を小学1年生から高校3年生まで拡大することが決定された。

平成24年えんずのわり・お籠り

平成24年のえんずのわりも例年通り1月11日から16日まで行われた。この6日間、子ども達は学校が終わると岩屋に集合し、自分たちで食事を作り籠る。

今回えんずのわりを行うのはA氏（小5・大将）、B氏（小4・副大将）、C氏（小3・三番大将）の3人で、学校が終わると夕方くらいに岩屋に集まり夕食作りを始める。岩屋の周りには子ども達の保護者やえんずのわり保存会会長の小野勝見氏、子ども達が通う宮戸小学校の先生や新聞社やテレビ局の取材陣が子ども達の様子を見ており、とりわけ保護者の方はほぼ毎日子岩屋に来て子ども達を見守っていた。

岩屋にはすでに薪、竹が用意されており、子ども達はそれを使って囲炉裏や竈に火を付けて暖を取ったりご飯を炊く。床には発砲スチロールが敷かれ、その上から御座が敷かれてあった。神棚には10本のろうそくと酒瓶に入ったお神酒、稲の入ったとっくり、おちょこ3個、お膳が供えてあった。

夕食作りが始まると野菜の皮むきを主に副大将、三番大将が行い、切り方は大将が行っていた。野菜は味噌汁の具で、にんじん、たまねぎ、だいこんなどであった。切り終えた野菜をボウルに移し、鍋に水を入れて囲炉裏で熱している間に竈でご飯炊きをで大将が行っていた。鍋が温

まったところで野菜を入れいしばらく熱した後、味噌を入れて味付けを行い、味付けは主に大將がやっていたが、副大將にも味見をさせて味の確認をしていた。しばらくするとご飯が炊きあがり、食べる準備へと取り掛かる。大將が配膳を行う間、他の2名は五十鈴神社へと駆け上がり、拝殿にて「家内安全、海上安全、えんずのわり安全、月浜のみなさん達者で（に？）働くように」と拝み、同様に天王様、観音様、秋葉様順に拝んで、大將が全員分と神棚に供える分の配膳を終えるまで岩屋の中には入らなかった。配膳が終わると2名が岩屋に戻って座し、大將が神棚に一度供えた膳を下して、大將から順に、神棚のお膳から箸を使って自分の膳へと食事を移す動作をし、それが終わると箸をクルリと回す動作をする。同様の所作を副大將、三番大將の順に行い、それが終わると合掌し「いただきます」と言って食事を始める。食事中は3人でご飯の味など色々な会話をしながら楽しげに食事をしていた。

食事を終わると後片付けに入る。その際に、大將に味噌汁を取材陣の人へ配るようにと大將の祖父から指示があり、大將が取材陣へ味噌汁を配った。後片付けは、主に副大將、三番大將が行い、食器と鍋、釜を水で洗う。水は大きいごみバケツに、集落内に自家菜園をしているD氏の水道の水を入れてそれで洗う。そのあいだ大將は囲炉裏に薪や竹をくべて火の調節などをしていて、洗い方や片づけの指示は祖父や大將の父、副大將の祖父などが指示やアドバイスをし、それを聞きながら子ども達は行っていた。

お籠りの間、岩屋に口ウソクの寄進をしに、男性1名とその娘（孫？）がやってくる。その口ウソクを副大將が貰い受け、そのお返しに大將が神棚のお神酒を振る舞った。男性は振る舞われたお神酒を飲み、子どもは飲む真似をし、「がんばってね」と声をかけて帰って行った。この口ウソクは14日の晩の集落まわりの際に、岩屋の内部に飾るもので、月浜の人は14日までに口ウソクを寄進しに岩屋を訪れる。

18:30頃になると囲炉裏の火を消して、岩屋を出る準備を始める。岩屋を出ると子ども達は風呂へ入りにいったん家に帰り、入浴後少し家で過ごしてから20:30ころに仮設の談話室に入って就寝する。談話室には3人分の布団が敷いてあり、子ども達の母親が付き添い、翌日に子どもたちを起こす時間を確認してから談話室を出て子ども達だけで寝る。

翌日は朝3:00過ぎに母親が子ども達を起こしに談話室に行き、起きた子ども達は着替えて岩屋へと向かう。早朝のためか子ども達は眠気眼で、夕食の時と比べて食事の準備が進まず母親に急かされるようにして動いていた。朝食も夕食の時と同様に準備し、副大將と三番大將が神社などで拝んでいる間に大將が配膳し、戻ってくると神棚のお膳を使った動作をしてからご飯を食べる。食べ終わったら鍋、釜、自分の食器を洗って後片付けをして、6:00前には岩屋を出てそれぞれの家に帰る。そこからまた少し寝たり学校に行く準備をしたりして、それぞれ学校へと向かう。

14日の集落（仮設）回り

14日に子ども達がマツノキと呼ばれる神木を持って各家を回することを月浜では「本番」（ホンバン）と言ったり「えんずのわり」と言ったりするが特に決まった名称があるわけではない。

この日は今回土曜日で学校が無かったため、子ども達は岩屋での朝食をいつもよりも遅めにし、家に戻ってから休んでから15:00ころに岩屋に集まって夕食の準備を早めに行った。この時に高校生が3人来て、岩屋に入って子ども達にお籠りの様子を聞いたりしてみんなで喋っていた。

夕食を取り終えると子ども達と高校生が、寄進された口ウソクを岩屋の淵や神棚、囲炉裏、竈などの淵に全て並べて火を付ける。岩屋の内部を囲うように並べられた口ウソクで岩屋の中は明るくなる。段々と取材陣や地域の人達が岩屋の周りに集まりだし、行事が始まる雰囲気が高まる。高校生達はこの間、仮設を回る際の唱え言の確認をし、大将に何を言うかの指示と確認をしていた。

19:00になると子ども達は神社に置いてあったマツノキを手にとって神社の前に一列に並び、その後ろには高校生達が一列に並んで行事が始まる。高校生の「せーの」の掛け声から子ども達が「えーい えーい えー(い) えんずのわりとうりょうば かづらわつてすをつけて たーどーが一みさたーたみいーれて えーぞがすんまさなんがせ えーい えーい えー(い)」とマツノキを地面に突きながらリズムを取って唱える。これを3回繰り返すと、高校生の「せーの」から子ども達が「おかはまんさく うみはたいりょう ぜ(じ)にのかね(め)はらめ」といって締める。同様のことを天皇様、観音様、秋葉様の順に行う。それらが終わると、家屋の残っている家3軒をまわり、そこから仮設を一軒一軒まわった。子ども達が来ると家の人達はご祝儀と米ないし餅を用意して玄関に座して待っており、子ども達は玄関前に一列に並び、「えーい えーい えー(い) …」の唱え事をご祝儀の数に合わせて言い（ご祝儀1つに対して3回唱える。2つある場合は6回となる）、それが終わると「民宿をやる予定はありますか?」、「海苔やっていますか?」などと聞き、それに対し、「やる」という答えがあれば「民宿繁盛するように」、「海苔大漁するように」と唱える。その他にも「商売繁盛するように」や「じいちゃん、ばあちゃん達で長生きするように」などがあり、「震災復興するように」という今までになかった言葉もあった。家をまわる順番は従来は決まっていたのだが、仮設をまわる際は従来の順番ではなく、仮設住宅を西から東へ順にまわるようになっており、プレハブの月浜公民館には震災後月浜を出た家族やこれまでに月浜にゆかりがあった人達など5組ほどが待機しており、子ども達が公民館にくると一組ずつ拜んでもらっていた。また、月浜仮設には里浜、室浜からの入居者もいて、今回のえんずのわりではその家もまわった。仮設を全てまわり終わると浜へ出て10メートルほどの間隔で並び「えーい えーい えー(い)」の唱え言を大声を張り上げてうたい、高校生から止めていいという指示が出るまでうたい続ける。それが終わると行事が終わり、岩屋へ引き上げていって、22時ころには家へ帰って風呂にはいり、その後談話室で就寝し14日を終えた。

15 日のご祝儀分配

15日は14日のもらったご祝儀をえんずのわりに参加した子ども達に配る日である。これには保存会会長であるD氏の立ち合いのもと民宿「かみの家」において行われる。子ども達にご祝儀の入ったバッグをもってかみの家に向かい、そこでご祝儀袋から現金を取り出して合計金額を数える。その金額から3人にお金を分けるのであるが、学年ごとに10円の差額をつける。そして本来は高校生にはお金をあげる必要はなかったが、今年から行事参加学年高校生まで引き上げたこともあり高校生にもお金を分配することとなった。だが高校生は部活などで行事に全日参加することは不可能なため、今回は配分を日当制とし、行事期間の6日間と薪やマツノキの準備をした2日間の合わせて8日間で計算される。10円の差額が適用されるのは小学生だけで、高校生の日当には差額がなかった。

16日のホイホイ

行事の最終日である16日は、神社での鳥追いを行う日である。朝5:00に子ども達は母親に起こしてもらって神社に迎え、正月飾りの切り紙を、ナマコを突くのに使用する竹の竿の先端に付けた竿を大将が持ち、一列に並ぶと「ホイー ホイ ホイ…」と言いながら神社の外周を4周まわる。これが終わると行事の一切が終了し、子ども達は家に帰っていった。

報告者名	俵木	悟	被調査者生年	1949 年（男）
調査者名	俵木	悟	被調査者属性	えんずのわり保存会長、民宿経営
補助調査者	大沼	知		

今年のえんずのわり行事を終えての感想・反省

まずは伝統の火を絶やさずにすんだことはよかった。子どもたちが頑張ってくれて無事終えたことで、とりあえず彼らの自身に繋がっただろう。これで彼らが中学校 3 年になるまでは安心かと思う。

反省があったのは、今年から高校生を正式に参加者としたが、学校から帰ってくるのが午後 7 時～8 時近くにもなるので、実質的に行事に参加する機会が少なかったこと。参加資格を引き上げたのだから、本当は高校生が大将になるべきだったし、松の木（家回りで唱えごとをするときに使う）をはじめから 3 本しか作らなかったのもおかしかったかもしれない。準備で松の木を切りに行ったときにも、高校生が一緒に行くかどうかで意見の食い違いがあった。これまでも参加年齢を引き上げたときには、その最年長の者が大将になってやってきた。ただし今回は、高校生は矢本から通っている者もあって、現実的に難しい面があった（参加した 3 名の高校生のうち、1 名は月浜仮設にいたが、2 名は矢本の仮設に入居していた）。最後にご祝儀を分けるときには、参加した日数によって分けた。将来的に子どもがいなくなったときのことも考えると、高校生まで正式な参加者であるという意識を持たせる必要がある。来年以降どうするか、きちんと話をし、意見を統一しないとイケない。

高校生まで正式な参加者とするというのは、昨年 8 月の伊勢講のときに提案し、10 月に区の役員と、保存会、子どもたち、その父兄で集まって話し合っただけで決めた（月に 1 度、土曜日に地区の集まりがあるので、そのときに話し合った）。

また、子どもが小さいということで、親が色々心配して手を貸していたのも、本来は子どもたちだけでやる行事で、必ずしも良いことではなかった。唱えごとで「震災復興するように」などの言葉もかけられていたが、これも親たちの発案だったようだ。

家回りの順序

今回、家回りは仮設住宅の中で、希望する家は（月浜住民以外も含めて）すべて回った。月浜の仮設に入居していないが、希望する人たちは、仮設の公民館に集まって、そこで拝んでもらった。

回る順番は、かみの家から出て、集落の中で残っている家をまず回り、仮設住宅の中は神社に一番近い北西の門の家から順番に回った（浜の集落を回っていたときも、神社の近くの家から回っていた）。最後は海に出て拝んで終わった。本当は、全部回った時点で松の木のギボシ（先端に切れ目を入れた部分）を折るのだが、ヒが悪くて（忌中で）回れなかった家があったので、

20日にその家を拝んで終わった。回る順番は保存会で考えて、地区の了解を得た。

神社の鳥居の再建について

壊れてしまった神社の鳥居について、神社の総代長として宮城県神社庁の災害掲示板に相談を求めたところ、それ以前から月浜の住人と縁があって復興支援をしてくれていた仙台の大崎八幡宮の宮司の目にとまって、自分の所の境内にあった杉の木を部材として提供してくれた。神社の鳥居が立って、年が明けてえんずのわりができたという一連の流れになるように、鳥居を12月27日に立てた。

その後も大崎八幡宮の宮司との縁は続いていて、1月21日の朝、七ヶ浜の菖蒲田浜でやっていた禊ぎ行事を月浜でやってもらった。

観光事業の再建について

奥松島体験ネットワーク（※1）の代表として、将来的に月浜を体験観光の拠点にしたいと考えて、去年の5月くらいから何らかの支援事業を探っていたところ、国（農水省）の「食と地域の絆づくり被災地緊急支援事業」を知った。そこで奥松島体験ネットワークと、宮戸地区漁業者の会（※2）の2つで申し込み、採用された。前者は従来の活動を引き継いで、定置網や地曳網などの体験メニューを用意し、後者は捕れた魚の産地直売を目指しており、2つを組み合わせで活動していく。3月18日にそのイベントを予定しており、そのために現在、浜にテントを張っている。これまで支援をしてくれた人たちや、一口オーナー制度に参加してくれている人などを150人ほど招待して復興のアピールとする。宮戸地区漁業者の会も、そこで海苔やワカメを販売したり、食事を提供するなどして、今後の活動に繋がるノウハウを得られるだろう。民宿の大半が流されてしまった中で、少しでもお客さんと呼んで楽しんでもらい、そこから利益を生み出していくための足がかりという意味がある。そして将来的には、浜に体験観光施設などができればと考えている。

体験観光の受け入れは今年から行う。すでに、東南アジアから青少年交流の団体客が来る予定になっている。最近ではボランティアの受け入れも、半分はボランティアとして働きながら、半分はここで遊んで楽しんでもらうというスタイルに変わりつつある。

観光の再建アピールは、マスコミの注目を集めるためにも、できるだけ早く行いたい。3月18日のイベントがその第1弾となる。

（※1）奥松島体験ネットワークは、船などをもって体験事業を積極的に展開している民宿経営者らの組織。現在の参加事業者は16人（12～3軒、震災で何軒かやめたところがある）。月浜の民宿が多いが、宮戸島の他の浜からも参加している。

<http://okumatutaiken.aikotoba.jp/network.html>

（※2）宮戸地区漁業者の会は、体験ネットが男性の組織なのに対して、主として女性たちの組織で、食事を提供したり、海産物の直売などの活動を行う予定である。

一口オーナー制度について

「奥松島観光再生プロジェクト」として、一口オーナー制度を設けている。奥松島の観光の復

興のために、一口1万円を出資して協力してもらおう。3月18日のイベントには協力してくれた人たちを招待する予定である。

(奥松島観光再生プロジェクト ⇒ <http://okumatutaiken.aikotoba.jp/>)

また、近いうちにココロカラプロジェクトという同種のオーナー制度が立ち上がる予定である(※3)。

(※3)現在、「ココロカラ」のサイト内の「リバーズ奥松島プロジェクト」として実施されている。

(リバーズ奥松島プロジェクト ⇒ http://cocorocolor.com/owner/ow_home5.html)

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1948 年（女）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	えんずのわり参加の子どもの祖母、漁業・海苔養殖・
補助調査者	大沼 知		民宿業

今年のえんずのわり行事について

これまで大將は中学生だったが、今回は小学生 3 人だけだった。今年は本当ならもう 1 人、小学 1 年生が入る予定だったが、震災で地区を離れてしまった。また、高校生の先輩たちも月浜の仮設にいなかった。そういったことで不安があったと思うが、本人たちは 3 人とも、行事をやりたいと言っていた。

今までは、上の者（中学生）から指示されてやっていたのが、今回は誰も指示をしてくれない。前回の行事で、一番大將から色々教えてもらっていたらしいが、とくに準備の段階で、いつ頃、どんなことをする必要があるのかがわからなかったらしい。準備や道具作りは、保存会や親たちがある程度手伝った。幸い、料理などに使う薪は流されなかったのも、それを岩屋の 2 軒となりの洞穴に置いておき、そこから取れば良いようにした（本来は、神社拝殿の裏に薪を用意してあり、そこから取ってくる）。

いつもなら、年少の者は宿泊はしないが、今回は小学生 3 人しかいなかったのも、神社に泊まるのも難しいだろうということで仮設の談話室に泊まった。布団などは文化庁の補助で購入した。子どもたち自身は、たいへんだということよりも、一緒にいられることが嬉しかったようだ。部落の総会のときに、保存会の人がまず子どもたちに、今年の行事をどうするかと聞いたら、すぐに「やる」と答えたほどで、楽しみにしていたようだ。

今回はとくに、浜に家がなくなってしまったことで、ボラの周囲が暗く、また浜の風が吹いてくると真っ向に当たるので、寒だろうということを心配した。

水は、以前はうちの民宿の玄関の水道と、神社の前の井戸の水を使っていたが、それが壊れてしまって、少し離れたところに住人の一人が作った水道から水を運んだ。子どもたちにはたいへんなので、うちのおじいさんともう一人のおじいさんが、テンタルに水を入れて、岩屋まで車で運んだ。その水も外に置いておくと凍ってしまうので、樽のまま中に入れて、朝はその水を使っていた。

子どもたちの父親は外に仕事に行っていて、帰ってくるのが遅くなるので、祖父が色々面倒を見ていた。ただし普段は子どもたちだけでやる行事で、大人は全く手伝わない。普通の年だと、年少の子どもたちが、宿泊している大將らを朝に起こしに来るが、今回は子どもたち 3 人が一緒に宿泊しているので、子どもたちの母親が毎日子どもたちを起こすことになり、母親はそのためになんげ宮戸小学校の仮設住宅からこちらの仮設住宅に来ていた（A 氏・B 氏の家族は、通学の関係で、月浜ではなく宮戸小学校の仮設に入居している）。母親たちは岩屋にも入れないので、

直接教えられずもどかしいところもあっただろう。

祖父らは、海苔養殖などに使った古い竹を短く切って叩いて潰し、子どもたちと一緒に焚き付けを作った（本来は杉の葉などを使う。薪で火をおこすのは、火力が安定するのに時間がかかるので、一気に火が付く竹を使った方が良さだろうと祖父らがアドバイスした）。その時でも、子どもたちは上手く鉋を使っていて、今まで先輩にならってきたことが生きていると思った。

民宿業の再興について

民宿を継続するためには、高台移転をしたところに、自宅用以外に多少なりとも土地を確保しなければならない。そのような土地が得られるなら民宿も再開したいと思っている。浜に民宿を建てるには、盛り土をして県や国の審査を通らないといけないと聞いている。その費用は相当かかるらしい。また、自分たちは高台に住んでいて、お客さんだけを津波が来たようなところに泊めることはできないと考えている。

移転先の宅地となる用地はだいたい見当が付いている。そのなかで、今まで民宿をやっていた家がすべて民宿を再開するのは難しい。民宿再開の希望が少なければ、その土地を確保できるかもしれないと聞いている。市の方にも聞いているが、もう少し待つて欲しいと言われている。

旦那さんは民宿を再開したいと強く希望している。自分たちのような年令になると、外に働きに行くことはできないし、かといってこのまま何も仕事をせずに余生を過ごす年でもない。

再開する資金に関しては、商工会などが主催する補助金の説明会などにも出たが、まだ具体的なところまでは考えていない。その説明会では、民宿もグループで経営するような方式が出されていたが、民宿でそれは難しいと考えている。

旦那さんは、これまでの民宿のお客さんに、今回の震災に関して色々世話になったので、できるだけ早く再開して、恩返しとして、少しでも早く、再開した民宿に招待したいと考えている。

息子（震災前は話者夫婦と一緒に民宿経営）は海苔養殖の協業グループにも入っているが、それも一年中・毎日の仕事ではない。民宿が再開できれば、孫たちの母親も外に働きに出ず家にいられるので、家族揃って生活ができる。

震災後の生活について

旦那さんは、震災後の一時期、友人を頼って外に仕事に通っていたが、息子も外で働いていて、2人ともここ（月浜）にいないと、この情報が入ってこない。それで外の仕事をやめて、11月から地元の瓦礫撤去作業をするようになった。部落の中でもざっくばらんな世間話などはよくしているが、大事なことは自分から情報を得なければならないので、ここにいることが必要である。

女性たちの組織

かつては婦人部や若妻会などがあったが、自分たちが40歳くらいで抜けた頃からなくなってしまった。今は嫁姑問題などないが、昔は姑さんとずっと家にいるのは気が休まらなかったもので、同世代のグループがあった。自分たちは若妻会を抜けた後、椿会というグループ（現在55歳～65歳くらいまで）を作って、近くの温泉と一緒に旅行に行くなど親しくしており、今回の震災

でも助け合った。自分たちの5歳くらい年長の女性たちも、別にグループを作っていて、よく遠方まで旅行に行ったりしていた。そちらのグループは年令が高くなって自然消滅したようだ。

他に山の神講と観音講がある。昔は観音講が嫁さんたち、山の神講（西と東に分かれている）はお婆さんたちという感じだった。今はどちらを拜んでも良いようになっている。自分は両方に参加している。1月12日が山の神講の日で、1月18日が観音講だった。昔は講の宿を決めて、ご馳走などを用意していたが、民宿を経営する家が増えて忙しくなると、旅館などを借りてするようになった。

それぞれの講の集まりのときに使う掛け軸があったが、津波で流されてしまい、山の神講の掛け軸が1つだけ残った（山の神講の1つと観音講が、震災時に偶然にも同じ家が当番になっており、一緒に流されてしまったらしい）。今年は1月12日に、残った掛け軸を、宿の当番の人が（仮設の）公民館にかけて、山の神講と観音講を一緒に行った。洗米と塩と水と幣束と蠟燭を供えて拜み、それからバスで出発して、途中道の脇にある山の神をお参りして、大観荘に行ってきた。

講の当番は、西の一番端からはじまって回す順番が決まっていた。部落内には、ツメバン（詰番 / 詰板？）といって、市からの回覧物などを部落内に配布するための役割が順番で回っており、ツメバンの家には板（札）をかけ、一度役目が終わるとその板を次の順番の家に戻す。講の当番もそれと同じ順番で回っていた。

部落の総会である伊勢講もこの順番で回っているが、伊勢講の場合は3軒一組で当番を担い、終わると次（4番目～6番目の家）に戻していた。この場合、当番3軒のうち一番若い順番の家を一番トエ（当家 / 当屋？）といって、その家で神様を受けとり、自分の家の神棚に上げる。伊勢講は年に2度（1月21日と8月21日）あるが、1回ごとに当番を回す。

報告者名	大沼 知	被調査者生年	1948 年（男）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	海苔養殖業、民宿経営
補助調査者	大沼 知		

平成 24 年のえんずのわりについての感想

今回のえんずのわりは、小学生のみでしかも 3 人しかいなかった状況の中で良くやっていたと感じている。特に大将は小学 5 年生ながら地域の伝統を守るという意識が感じ取れて感心している様子であった。震災の影響もあり、今回えんずのわりをやるのは正直言ってキツイしやなくてもいいんじゃないかと子ども達に言ったが、今年の大将は自分の孫だったが、「自分が大将の時に行事が途絶えるのは嫌だ」と言っていたことから頼もしさを感じていた。また、ご飯炊きが今までのえんずのわりの中で、一番上手に出来たのではないかとしきりに褒めていた。

今年は震災があって正直行事をやるとは思っていなく、従来通りの形式であつたら出来なかったであろうと感じている。今年は水汲みもなく、寝泊りする場所も神社ではなく談話室であったため、そういったことも含めて行事を行うことができたのではないかとと思っている。

昔は行事の際の唱え言も、大将が自分で考えて言っていたが、段々と行事に参加する子ども達の人数が少なくなってきたことから、高校生ら先輩に何を言っているかなど頼るようになったという。自身がえんずのわりをやっていた時は、大将という存在には絶対服従で、どんなことでも言うことを聞かなければいけなかった。また食事前に大将も風呂に入って身を清めていた神社でお参りしてからご飯を食べていた。またお神酒には新藁を 3 本さすのが決まりで、囲炉裏の砂も敷きかえた。

民宿再開について

自分達が 60 歳を超えて、今まで自営業をしてきた身であるから今から新たに誰かの下で働くというのはできない。震災後、瓦礫撤去作業に従事する前に友人の墓屋（墓石屋か？）で修理をしたりしていたが、人に使われるというのは並み大抵のことではなかったと語る。そんな中で民宿のいいところはその場で現金収入がのぞめるところだという。それ以外にも震災前と震災後を通して民宿のお客さんにいろいろと世話になったことが忘れられないと語り、長い付き合いのお客さんからは食べ物、飲み物、義援金などといった様々な支援をもらい、それに対して返せるものは何もないが、今のところ自身の夢は民宿を再開させて、これまでに世話になった人達を新しい民宿へ招待することで、それが恩返しにもなるのではと思っている。

民宿を再開するにあたって自身の構想では、以前よりも規模を小さくしてもいいと考えている。それにあたって東松島市が開いた 1 回目の懇談会で、高台移転についての説明の際に民宿業を営んでいる者として、土地の確保だけはどうかにならないのかと質問をしたが、返答としては要

検討とだけに留まっているらしい。ただ、個人的に市に赴いて移住先に店舗付で土地を提供してくれるやり方はないのかと聞いていて、市および国の方では土地に店舗を加えた形で申請ができるようになるかもしれないらしい。またそれに対しての補助金も出るかもしれないという。その際には何件かと名義だけでも組んで（民宿業同士が固まるのではなく、例えば商店、ラーメン屋などいった店舗営業希望者と組む）申請をするという形にすると補助の体制がすごく良いらしい。

第1回目の市からのアンケートで、月浜で民宿業の再開を希望したのが鈴木家の1軒のみだったが、それから何度か会議において民宿業の再開に関する質問や補助の願いを出していると、市からも対応を考える動きが出てきて、2回目のアンケートでは月浜での民宿再開希望が5軒に増えた。

津波を受けた浜の土地は市が一坪万円くらいで買い上げることになっている。「危険区域」であるから売るか売らないかは土地所有者が決定できるようだ。「危険区域」に建物を建てる際には4メートルほど盛り土で嵩上げし、建物も鉄筋などにする必要がある。それに必要な資金に補助がでるかといったところは不明だが、そこまでして元の浜に住むかは地域の人達にとっても微妙なところであるらしい。

月浜の青年団（青年会）について

話者が若いころは月浜にも青年団があり、いつの頃からか青年会と名称を変えた。女性も青年会には参加しても良いことになっており、お祭り（五十鈴神社の祭礼の時か。）の時に踊りを踊ったりしていた。踊りをやらなくなってからはカラオケ大会などをしていた。こうした活動をしていたのは話者が未婚の時で、男女で集まって何かをするということは楽しかったそうである。

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1945 年（男）
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	えんずのわり参加の子どもの祖父、民宿業
補助調査者	大沼 知		

今年のえんずのわり行事について、親族としての苦労など

少子化が進んで、すでに去年からこの 3 人（今年の行事に参加した小 5 ～小 3 の 3 人）でやることは分かっていたので、家族・親族として当初は心配していた。話者の孫の A 氏は小学 2 年生から参加しているが、年ごとに成長の様子が見えたので、仲間で協力してやればなんとかなるのではと思うようになった。子どもたちは嫌だとは言わず、やるんだという気持ちが強かったようだ。楽しいということもあるし、伝統を守るという意識もあったのではないかな。

行事の前に神社の周りを掃除したくらいで、小学生だけだからといって特別な世話などはしなかった。なるべく大人は手を出さないという意識もあった。部落としても、神社の鳥居を新調したりはしたが、とくに何か手伝ってほしいという声かけもなかった。

震災の影響ということでは、浜に家がなくなってしまったので、多少は心配して見に行くことはあった。ボラ（岩屋）で使う水が、震災前は千鳥荘（岩屋に一番近い民宿）の海苔乾燥庫からもらっていたが、震災で水道がなくなり、井戸も使えなくなったので、大人がテンタルに水を汲んで運んであげた。

米を炊くのは、少人数分だし、そのわりに大きな釜を使っていたのでたいへんだと思っていたが、今年はとても上手にご飯が炊けていた。

たいへんだったのは参加した子どもの母親たちで、談話室に寝ている子どもを早朝 3 時に起こしに行っていた。起こした後も、心配もあって、手は貸さないまでもしばらく子どもたちの様子を見ていたようだ。小学生 3 人だけで、上級生がいなかったのも心配の理由の一つかもしれない。朝の食事をすませて自宅に帰ってくると、少し休ませてから学校まで送っていた。他にえんずのわりに参加した子ども 2 人は兄弟で、宮戸小学校の仮設住宅に入っているのだから、話者の孫だけが、朝の行事の後、自宅から学校に通った。ふだんから 3 人は仲が良く、A 氏は、小学校の仮設に入っている兄弟と遊ぶために、一度自宅に帰ってきてから、再度小学校まで出かけていくこともしばしばだという。

自分が参加したえんずのわりと、現在のえんずのわりの相違

一番の違いは、風呂がなくなったことと、神社の前の井戸を使わなくなったこと。

井戸はオイドと呼ばれ、部落の中心でもあり、清い水であるとされ、部落中で大切にしていた。自分が子どもの頃は井戸にポンプなども無く、バケツにロープをくくりつけて汲み上げていた。バケツに水を上手く汲むのは難しかった。風呂はボラの中に五右衛門風呂の釜があつて、そこに

井戸から汲んできた水を入れていた。朝3時頃に風呂に水を入れるのだが、井戸の縁が凍っていてとても寒かった。

ボラには年長の者から4～5人が泊まり、それ以外は家に帰って寝ていた。他の子どもは3時頃に起きて、ボラに寝ている者を起こしに行った。そのために、子どもの母親も3時頃に起きなければならなかった。

昔は肝試しもあった。明るいうちに特定の場所に目印になるようなものを置いておいて、暗くなってから、それを取ってこいと命じられる。所々に人が隠れていたりして驚かしていた。

子どもに辛いことがあったときには、よく「えんずのわりはもっと辛いよ」などと言われたものだ。また先輩が怖かったという思い出はある。同じ学年でも、生まれが早いものが上位になる。ただしえんずのわりが終われば、同学年の中での序列関係は意識しなかった。

かつて、えんずのわりのときにやっていたという嫁のスミツケについては、話は聞いたが自分が子どもの頃はすでにやっていなかった。自分が青年部にいたとき（40歳くらいの頃と記憶している）、公民館でカラオケ歌祭りというのを2～3年やったが、その中で若妻会と一緒にスミツケの再現劇をやったことがある。そのビデオを撮って持っていたが、津波で流されてしまった。

お籠もりの最後の日にカレーを食べても良いというのは、自分は知らなかった。自分が子どもの頃は、今の学校がある近くに豆腐を作っていた家があって、そこに豆を持って行って、豆腐や油揚げにして持ってきてもらった記憶がある。味噌汁に入れたり、働きが良かった褒美にもらえる三段豆腐になった。

これからのえんずのわりについて

現在の3人でしばらくは続けられるが、次の子どもが入ってくるのは、予定では再来年。それも親の考えなどで、必ずしも小学1年生から参加するわけではない。話者の孫も1年生のときにはかわいそうだと思って2年生から参加させた。それでも月浜に生まれた男なら必ず通る道である。親世代も、やってほしいし、やらせたいと思っているはず。今年から参加資格は高校3年生までになったが、現実には高校生になると参加は難しい（今年も仙台の高校に通っていて来られなかった者が1人いた）。

昨日の新聞（2月16日付河北新報）に、平成28年に小中学校が統合するという話が出ていたが、そうなるとバス通学になり、中学生でも参加に支障が出るかもしれない。

現状では、今年一番大将だったB氏を中心に続くのでうまくやれると思う。話者の孫のA氏も1年だけは大将を務めることになるが、その時までには成長して大丈夫だろうと思っている。

えんずのわりと女性の役割（C氏の回答）

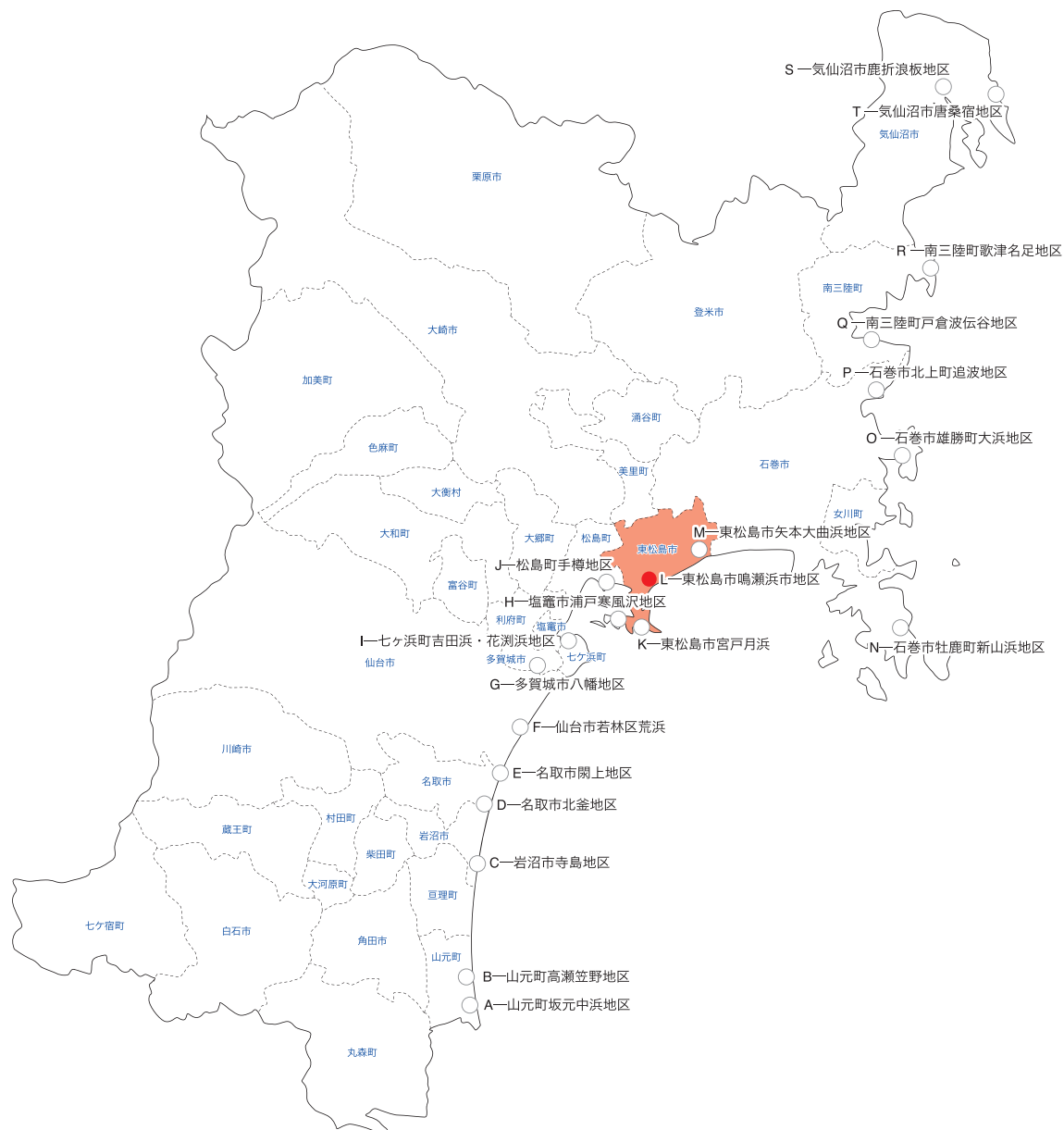
自分は娘ばかり3人だったので、孫が参加するのが初めての経験でとても嬉しかった。しかし祖母として何か特別なことはしていない。椿会など地区の夫人の集まりでも、とくに何かするという話は聞かなかった。ボラは女人禁制だということもなんとなく知っている。

自分のところでは、お籠もりに入る何日か前から、自宅でジャガイモの皮のむき方などを練習したが、自分が関わったのはそれくらいである。

その他

昔は神社の祭りのときに、青年団（後に漁協青年部）が中心になって演芸会をやった。神社の境内の西側に木を組んで舞台を作り、下にドラム缶や臼のようなものを入れて、その舞台で自分たちで練習した踊りをやった。

L-0 東松島市鳴瀬浜市地区



浜市地区は、鳴瀬川の河口左岸に位置する。世帯数 130 戸ほどの集落である。江戸時代より浜市村として一村をなしていた。

地区の生業は、農業、特に稲作が中心である。歴史的には、江戸時代までは河口の集落として、鳴瀬川舟運で集まった物資を仙台、石巻に運搬する物流の拠点であった。また、こうした立地もあり、明治時代になると日本初の近代港湾の整備が決まり、野蒜築港が事業化された。この時期は工事関係者などにより新興市街地が形成された。事業そのものは開始後 3 年目に台風により破壊され、事業は放棄された。新興市街地も現在は田地となっている。

地区内には石上神社があり鎮守である。檀那寺は曹洞宗津龍院である。また、鳴瀬川上流、加美町宮崎熊野神社の浜降り行事の受け入れ地でもある。

東日本大震災では、地区のほぼ全戸が津波の被害を受け壊滅的な被災をした。東松島市の復興計画では、内陸側に集団移転が行われる予定である。

L-1 東松島市浜市

2012 年 1 月 13 日（金）

報告者名	木村 敏明	被調査者生年	1944 年（男）
調査者名	木村 敏明	被調査者属性	浜市区長
補助調査者	赤尾 智宏		

話者情報

話者家は、津龍院の過去帳によると、少なくとも 230 年前から浜市に住んでいる。

話者は石巻で被災し、震災後 2 日目の 3 月 12 日は浜市小学校の体育館で過ごし、その後東松島高校へと避難所を移った。避難所は床下がコンクリートで非常に寒く、また足も伸ばせないほど多くの人々が避難していた。話者は心臓が悪く、通院していたこともあり、健康面を配慮して娘の家に移った。5 月 1 日より現在の住居にアパート住まいである。

話者の自宅には津波によって泥が流れ込み、アルバムなど記念写真が失われた。

話者は農家をやっていた。現在、農地の除塩や地盤整備が進められているが、農業を再開するとなるとトラクターなどの機械が必要で 1,000 万位の資本がいる。先を考えると元がとれるかどうか分からないので、今年からは土地を貸すということになるだろう。

浜市地区の被災状況

浜市地区の人口は、135 世帯 470 人。地区は壊滅状態で、ほとんどの家が流出し、51 人が亡くなり、1 人が行方不明である。

昨年の 5 月 1 日に浜市地区の住民の間で、高台への移転など今後の地区の在り方について話し合いの場が持たれた。公営住宅に住むか、震災以前と同様に浜市地区に住むか、集団移転するか、いくつかの意見が出された。市から提示された移転先も浸水区域だったので移転しても同じではないかという意見もあった。

浜市地区の田畑は津波でほぼ全面が浸水した。

浜市で農業従事者は 40 人、漁業が 10 人弱、自営業・大工が 10 人、それ以外の大多数が勤労者である。農家の多くは農作業、農地を委託していたが、今回の震災でほとんど全ての農家が委託することになるだろう。

地盤整理がされ、今年から苗植えは可能になるが、話者は今回の津波でトラック 2 台が流出し、農家を出来る状態でない。

2 月より、浜市地区の住民に対して個人面談が始まる。市から提示された浜市の土地買い上げの額は、予想よりも高く震災前の 8 割、2 万 8 千（坪？）ということになっている。ただしこれは宅地のみで、農地については同様に買い上げを要望し、次回の面談で回答をしてもらうことになっている。予想よりは高かったが、例えば駅周辺の土地は 8 万位なのでそれを買えるほどの額ではない。

震災前住んでいたのは、子ども夫婦が浜市以外の場所で暮らしている老夫婦がほとんどであった。

宮崎町の参加者を泊めた浜市の住民との間には個人的な交流があり、今回の震災で避難所暮らしを強いられ、お風呂に入られなかった人を宮崎町上町にある温泉ユーランドに連れて行くなど、支援があった。6月末まで、週に1・2回温泉へバスで送迎してもらった。また、6月には見舞金も貰った。

浜市の住民は、いくつかの仮設住宅で生活している。

潮垢離行事に関する被災状況

昨年(2011年)の3月14日に潮垢離行事について、浜市、宮崎町、熊野神社総代、役員4、5人で最終打ち合わせが開かれることになっていた。

4月15日、16日の2晩で潮垢離行事を行う予定で、浜市漁港の漁船に神輿をのせて運んでもらえるよう依頼するつもりだった。今回の潮垢離は区長の話者が中心であり、20年前の前はA氏が実行委員長を務めた。A氏は浜市地区の生き字引の様な人で、潮垢離行事についても精通していたが、今回の震災で亡くなった。

潮垢離は、区の主催ではなく、B家個人に宮崎町から神輿が運ばれていた。区から個人に要請して実施されていた。浜市には鹿野、阿部姓が多く、鹿野姓が一番古い家であり、2、3の分家に分かれている。

前回の祭主はC氏で、3年前に亡くなった。C氏の妻は今回の震災で亡くなり、息子のD氏はC氏より先に亡くなっていた。

今後の潮垢離の「祭」は熊野神社に依頼することになり、大々的なことはできなくなる。

昨年は、誰がご神体を「潮垢離する」かについては未定であった。行事の詳細については、熊野神社側に委ねられることになりそうである。

過去の潮垢離行事

20年前、前回の潮垢離行事は、2日間かけて行われていた。潮垢離に必要な費用は、全戸から3,000円徴収していた。

1日目、宮崎町からクルマで浜市まで神事で使用する神輿を運んだ。

途中、神輿は鳴瀬町の役場前に寄り、町長からあいさつがあり、鹿踊が披露された。

鳴瀬第一中学の近くにある小野幼稚園で、神輿が受け渡される。白い衣装を身にまとった浜市の若者が、4km歩いて鹿野家まで神輿を運んだ。神輿は、鹿野家のザシキで臼の上に安置される。

宮崎町の参加者70～80人が、一軒に2～3人ずつ浜市の各家庭に宿泊し、もてなしを受けていた。現在は、一人暮らし、老夫婦が多く、負担が大きいため、前回のように宿泊してもらうのは難しい。昨年は、民宿や地区センターに替わりに泊まってもらう予定だった。40年前の前々の潮垢離行事は、(宮崎町の参加者は)バスで来ていた。それ以前は、小牛田から何日もかけて歩いて来ていた時期もある。

2日目、神輿と共に宮崎町の鹿踊が浜市を練り歩く。通る場所はあらかじめ決まっている。

浜市漁港から船2艘に神輿を乗せて、「ドウバ」と呼ばれる浜辺まで運び、見物人は橋で浜辺

まで移動する。

浜辺に着くと、竹を4本立て、竹を縄で結びつないで、「お参りする」ために作られた空間で神事が始まる。祭壇は、海の方に向かって設置されている。

潮垢離行事で、神輿に入ったご神体を海水で「お潮垢離」するのC氏の役割だった。

神事後、宮崎町の神主からお札が配られる。

浜では宮崎町の参加者が、浜辺の砂を袋に入れて持って帰った。

浜市地区の宗教施設

今年は、浜市の石上神社で祭はなかった。秋の祭では神輿を担いでいた。石上神社の宮司は、東松島大潮出身である。

浜市の全ての住民が石上神社の氏子というわけではない。135世帯を7つの組に分け、行事、施政に当たる。その各隣組から総代が7名選ばれ、その中から総代長が1名選出される。

曹洞宗津龍院は浜市の檀那寺である。岩戸山にも檀家を持っている。

ドヤブシ

大正時代、浜市には現在より漁師が多く、漁に出るときに歌われていたのがドヤブシである。浜市に伝わっていた唄であり、現在はドヤブシの保存会もある。

秋の祭の神輿について回り、ドヤブシを歌う祭好きの老人がいた。その老人の子孫がドヤブシを覚えていて、継承した。ドヤブシは、盆踊りや浜市小学校の運動会で披露された。

L-2 東松島市浜市

2012 年 1 月 13 日（金）

報告者名	赤尾 智宏	被調査者生年	生年未確認（男）
調査者名	木村 敏明	被調査者属性	東松島市教育委員会 生涯学習課文化財班長
補助調査者	赤尾 智宏		

話者の被災状況

話者は宮戸島で被災した。津波によって道路が遮断され、一時島は孤立状態にあった。震災後しばらくの間、避難所対応に追われた。文化財関係の仕事が出来るようになったのは、最近のことである。

宮戸島と東松島市の集落

宮戸島は漁業が中心、大曲は漁村、野蒜は漁村が中心、昭和 35 年まで塩田が盛んだった。宮戸島には 4 つの集落があり、縄文館がある集落は内海であるため、2 m 以上の津波の浸水があったが、壊滅は免れた。一方、他の 3 つの集落は津波が直撃し、流出した。

浜市地区の概況

浜市地区は牛網地区と隣接しており、河口側が浜市、石巻側が牛網である。浜市には浜市漁があり、港養殖や漁で収入を得ている家もあるが、農家をしている家もある。浜市地区は一つの通り沿いに大きな屋敷が密集していた。話者は、小野から、浜市、矢本へと続く街道が関係しているのではないかと話者は考えている。昭和 50 年代に浜市地区の古民家調査を実施したときには、茅葺き屋根の家もあった。しかし、平成 15 年の宮城県北部沖連続地震で家を改築、修復した。死者はいなかったが、全壊、半壊の家屋が相当数あった。石巻、矢本、鳴瀬でも家屋の被害はひどかった。平成 15 年に修復してから、それほど時間が経たないうちに昨年の津波の被害を受けた。今回の被害は浜市地区住民にとって痛手となっている。

話者は、浜市の宗教施設は石上神社、津龍院などがあると、『鳴瀬町誌』を参照しながら説明した。

浜市地区の被災状況

浜市地区には津波で流されなかった住居がいくつかあり、生活をしている人がいるかもしれないが、正確にはわからない。今回の津波の被害を考慮すると、浜市の海に近い場所で暮らすことは出来ない。

復興計画として、住居が残っている浜市地区の北側に住居を造成するか、移転先を探すか、明確な決定はなされていない。仮設住宅は、45 号線沿い駅前一丁目にあるが、浜市地区の人は、必ずしもその仮設住宅に住んでいる訳ではなく、市外で生活している人もいる。

浜市小学校は、小野地区に建設されたプレハブに昨年末に移動し、今年の新学期よりプレハブ

で学校が始まる。

潮垢離の震災の影響

昨年 3 月 19 日、潮垢離に関する会合が、教育委員会、浜市の部落住民ら関係者によって開かれることになっていた。文化庁関係者が来て、映像記録も撮る予定であった。

浜市でご神体を泊める鹿野家は、住宅ごと津波で流され、一人暮らしをしていたおばあさんが、今回の震災で亡くなった。鹿野家の身内は浜市地区の周辺に住んでおらず、孫は遠くに住んでいる。ご神体の入った神輿をのせる臼も一時流出した。

臼を探してほしいと呼びかけたところ、瓦礫撤去の業者、消防団によって、潮垢離で使用するものではないが、農家の各住民宅で使用していた臼が、複数話者に届けられた。

6 月に瓦礫と混じり合った状態で、鹿野家から 200 ～ 300 m 離れたところで半分に割れた臼が見つかった（写真 1、2）。平成 12 年に撮影した臼の写真と照合して、潮垢離で使用する臼であると話者は判断した。臼は半分に割れてしまい、残りの半分はまだ見つからない。ほとんどの瓦礫が撤去済みであるため、発見不可能である。重機が入る前に言ってくれないと無理だともいわれたが、たまたま入っていなかった場所でみつかった。神さまのおかげとしか思えない。

塩垢離に最も詳しい人が今回の震災で亡くなった。情報提供者の A 氏は、前回の塩垢離参加者である。本人は、「俺もあんまり詳しくない」と言っていたようである。A 氏は、浜市地区の区長である。

どや節

潮垢離以外にも浜市集落にはドヤブシという行事があり、保存会もある。震災後も運動会で子ども達が踊った。

野蒜港

野蒜港は、明治 11 年に着工が開始された、話者によると、日本における最初の近代的な港であり、神戸、横浜よりも早い。野蒜港の着工は、明治の始めに東北開発の足がかりとして始めら



写真 1 鹿野家の臼 1



写真 2 鹿野家の臼 2

れた。岩手、福島から運河で特産品を集積し、アメリカ諸外国へと輸出するという構想があった。野蒜港事業の計画者であった B 氏は、着工の数ヶ月前に暗殺された。ヨーロッパの最新土木技術を取り入れた港であり、近代史、土木史において重要な港であると話者は考えている。

浜市の南側を流れる北上運河、鳴瀬川より松島湾へと続く東名運河は、野蒜港着工事業と関連して整備された。

明治 15 年に工事が終了するが、2 年後の明治 17 年に台風によって港は壊れてしまう。台風の損害をきっかけに工事が中断されてしまう。

野蒜港も津波の被害を受けている。重要な遺跡なので保存したい。

L-3 加美町宮崎地区

2012 年 2 月 6 日（月）

報告者名	沼田 愛	被調査者生年	① 1943 年、② 1942
調査者名	木村 敏明	被調査者属性	① 氏子総代会会長、宮崎獅子舞保存会の中心人物、
補助調査者	沼田 愛		② 熊野神社禰宜、東松島市生まれ、妻が熊野神社宮司

調査地と氏子総代会の概要

旧宮崎村は、加美郡加美町の西側に位置し、東川北・西川北・上小路一・上小路二・下小路一・下小路二・東町・下町・仲町・上町・赤坂原・西原・南永志田・北永志田・切込・寒風沢の 16 部落から成る。これらの部落のうち下町・中町・上町は「町城内」と称される。寒風沢などの地域は「西部」と呼ばれる（範囲など未確認）。

旧宮崎村は熊野神社の氏子圏であり、氏子総代会を組織している。氏子総代会は、各部落から選ばれた 18 名の氏子総代と、その経験者である顧問 1 名によって成る。部落ごとの総代の人数は以下の通り。

部落名	人数	部落名	人数	部落名	人数
東川北	2	東町	1	南永志田	1
西川北	1	中町	1	北永志田	2
上小路一	1	上町	1	切込	1
上小路二	1	下町	1	寒風沢	1
下小路一	1	赤坂原	1		
下小路二	1	西原	1		

東川北と北永志田はどちらも 2 つの集落がまとまって一行政区となっているため、2 名選出となっている。『宮崎獅子舞』（千葉雄市監修・宮崎獅子舞保存会編、2004、p. 32）では、各集落の「契約講」から 1 名ずつ選出されると記述されている。総代長 1 名・副総代長 2 名を三役と呼び、これに宮司を加えて四役とも言う。四役に元総代であった顧問を含めた 5 名を責任役員、あるいは事務局と言っている。

熊野神社の宮司は、柳沢の諏訪神社の神職も兼務しており、今後は八幡神社も兼務する予定である。

春季例大祭と式年祭

熊野神社では毎年旧暦 3 月 15 日に春季例大祭を行っている。式年祭である御潮垢離神事は、20 年ごとにそれに先だって行われる。式年祭は近年では昭和 6 年、昭和 26 年、昭和 46 年、平

成3年に行われている。なお、春季例大祭は、戦中も行われており、学校が休みであったため、ひとがたくさん出た。小学校や役場にも神輿が出向き、獅子舞をしていた。

宮崎を出発した神輿は、ご神体がのぼってきたと言われている鳴瀬川沿いのルートを辿るように周辺の町をまわりながら浜市まで行き、浜市の海岸で御潮垢離神事を行い、宮崎に戻って各集落を神輿が巡行する。昭和46年以降、御潮垢離神事には、中新田の鹿島神社の宮司も参加している。ご神体を海水につける役は男性でなければならないが、宮崎の熊野神社の宮司は女性であるためである。海の神が女性だから敬うためではないか。

平成23年度に予定されていた日程は以下の通りである。4月15日、熊野神社で神事を行ったあと、加美町から大崎市三本木を通して、東松島市浜市まで神輿を巡行し、浜市地区センターにて、鹿野家に保管されていた臼に神輿を安置して神事を行う。4月16日、浜市地区センターを出発し、海岸で御潮垢離神事を行い、宮崎に向けて発つ。4月17日、春季例大祭として熊野神社で神事を行い、「町城内」を神輿が巡行する。4月18日、熊野神社で神事を行った後、旧宮崎村の「西部」の各集落を神輿が巡行する。

御潮垢離の一連の行事の参加者のなかに、指達（しだち）と呼ばれる役がある。式年祭の3日目に神輿が「町城内」を巡行する。神輿が「町城内」に入るときには、氏子総代ではなく、指達が巡行の一切を取り仕切る。指達は上町・中町・下町から3名ずつ選出される。とくに上町の指達は威厳が強いという。御潮垢離には、各町の指達のうち1名を代表者として出し、3名の指達のみが浜市まで赴く。各町で指達の選出方法は異なり、家の並び順などが関係していると想像されているが、話者①も詳しいことは分からない。指達の任期は1年間（「年交代」）になっている。

指達は事前に寄付集めを行い、「町城内」での昼食場所の用意や、獅子舞をどこで行うか、どの家をお祓いするのかということを決める権限を握っており、神輿巡行の段取りをする。指達とくに上町の指達から要請がないと「町城内」を神輿は通ることができない。昼食場所は、以前は中町にあったスガワラ床屋（正式名称未確認）の座敷を借りていたが、主人が亡くなったため、現在は公民館の1カ所のみを昼食会場として使用している。指達は、自分の妻とともに昼食の用意なども行う。

「町城内」の神輿の巡行が終わると、「西部」の集落も回る。それぞれの集落でお祓いをして、獅子舞を奉納する。「西部」の上小路を回り終わったら熊野神社に戻る。以前は「西部」への神輿の巡行は、20年に1度（式年祭の御潮垢離神事がある年）にしか行っていなかった。しかし、「西部」の住民にとっては、巡行の間隔が長いとどのように神輿が巡行したのか、集落でどう受け入れたのかといったことが分からなくなるという意見があった。そこで、平成3年からは10年に1回、「西部」に神輿巡行をするようになった。しかし、平成21年（話者①が総代長になって）からは毎年「西部」に行くようになった。これは、「町城内」の住民と同じように「西部」の住民も寄付を出しているのに、不公平だという意見が出たからである。「西部」では、旭小学校の近くにあるコミュニティセンター（西原、永志田の周辺）で獅子舞も行う。例年の春季例大祭での神輿巡行は、「町城内」の上町から、直接「陶芸の里」（西原、永志田の周辺）に赴く。式年祭の場合は、「町城内」と「西部」で日程をわけるといえる。

御潮垢離を10年に1回行ったらどうかという意見が出たことがあったが、それは難しいという結論になっている。御潮垢離行事の執行には300万円ほどかかるなど費用が大きい。参加者

が 7-80 名おり宿泊先への「お返し」が必要。

平成 24 年度の春季例大祭は 5 月 5 日に行う。平成 24 年は、旧暦 3 月 15 日は新暦 4 月 5 日、旧暦閏 3 月 15 日は新暦 5 月 5 日であるが、閏年なので、新暦 5 月 5 日に行う。これはすでに神社庁に届けも出している。

東日本大震災の影響

加美町宮崎から東松島市浜市への神輿の巡行は 20 年に 1 度のことであるため、氏子総代会では平成 21 年から準備を開始し、平成 22 年 11 月から実行委員会を立ち上げ、本格的な準備に取り組んでいた。今回の実行委員会には浜市の人が入っていなかった。前回（平成 3 年）の御潮垢離のときには、浜市の区長が浜市で実行委員会も立ち上げ積極的に受け入れてくれた。しかし話者①によれば、今年は前回よりも積極的ではなく、場所の提供などできる範囲で協力するというような姿勢であった。そのため浜市側の実行委員会はない。

平成 23 年 3 月 10 日には、ポスターとパンフレット（チラシ）が完成していた。3 月 16 日に浜市と最終的な打ち合わせを行う予定であった。これは宮崎の氏子総代会で決めたことを、浜市に連絡するための打ち合わせであった。今年度の式年祭（御潮垢離）は、4 月 15 日金曜日から 4 月 18 日月曜日まで 4 日間の日程で、浜市へは初日の 16 時に到着し、神輿を安置して神事を行う予定であった。

しかし、東日本大震災を受けて式年祭は中止された。震災直後は沿岸部の状況が分からなかったが、震災 1 週間後くらいに加美町役場から浜市の状況を聞き、御潮垢離はできないと言われた。宮崎の住民の中には発電機を持っているひともあるので、そのひとがテレビを稼働したため、話者①らは浜市の被害を目にした。

春季例大祭は、神社庁に開催をどうすべきかという打診をしたところ、各地で祭礼は自粛しており慎んだ方がいいのではないかとされた。そのため平成 23 年 4 月 17 日には熊野神社の例大祭を行ったが、旧宮崎村内においても神輿の巡行は行わなかった。加美郡内の他の地域でも賑やかな祭りは取りやめていたようだ。熊野神社では、地震により鳥居や灯籠が倒れるなどの被害がでて、約 200 万円の損害となった。

震災後の浜市との関係と、御潮垢離の今後の展望

浜市と連絡が取れたのは 3 月末であったが、津波による沿岸部の被害を知り、宮崎では浜市への支援を行った。まず熊野神社氏子総代会を開き、具体的な支援の方法を考えた。浜市に何か支援等を行うときは、まず氏子総代の役員会で原案を作り、それを元に氏子総代会を開催して審議し、支援内容などを決定した。

氏子総代会で協議した結果、仮設住宅には 4 月に米を支援物資として持って行った。支援物資としては、ほかに水という案も出されていた。ほかに、浜市へのお見舞い金として 30 万円を渡した。4 月のはじめから 6 月まで「陶芸の里」（平成 6 年に町営として営業開始、平成 11 年 4 月より株式会社陶芸の里宮崎振興公社）にある入浴施設「ゆ〜らんど」が、浜市をはじめとした東松島市の住民に風呂を提供した。バスで送迎もした。氏子総代会では、東松島市から「ゆ〜らんど」に来る人々に対し、昼食を提供することにした。これには民生委員や婦人会のひとつとに

協力を要請し、熊野神社の氏子たちで行った。

こうした支援活動は、これまで御潮垢離神事の際に、浜市地区の住民に世話になったことに対する恩返しという気持ちもあった。浜市地区からは、役員のひとたちが7月に御礼として宮崎に来た。

話者①らは、昼食の提供などが終わった後も、浜市地区の様子を気にかけていた。話者①は浜市の復興のようすを確認するために、平成24年1月に浜市や大曲周辺を訪ね、写真を撮ってきた。浜市を訪問したのは、1月から3月にかけて、宮崎の各集落で総会が行われ、その際に御潮垢離を行うのかどうかを伝えなければならないからである。実際に、集落の役員から今年開催するのかどうかの問い合わせがあった。

話者①の実感としては、神輿が浜市に降りることができるようになるのは来年か再来年である。浜市への神輿の巡行は20年に一度の周期であるが、それにこだわらずに、浜市が復興したら巡行したいと思っている。

しかし、浜市は津波の被害を受けているため、復興後もこれまで通りにはできないと考えている。たとえば、浜市地区で神輿を安置するための臼を保管し、御潮垢離神事でご神体に海水をかける役であった鹿野家の住民が震災により死去したため、受け入れてもらえる体勢ではない。ご神体に海水をかける役は、浜市の「一般」のひとから選ぶのも大変だと思うので、今後は熊野神社宮司に行ってもらいたい。

神輿が浜市まで巡行できても、神輿が浜まで行くためには、貞山堀（北上運河）を渡らなければいけないが、これは平成24年1月現在仮設の橋であることから、神輿を担いで渡ることは難しいと考えている。また、浜市での宿泊場所として利用していたかんぼの宿が被災して使用できないため、浜市から日帰りしなければならないと思われる。日帰りの場合は、獅子舞をするひとたちが疲れることが懸念される。

だが、浜市地区の住民の方が住んでいる仮設住宅を獅子舞が回ってお祓いをしてほしいというような要望があれば、それに応えたい。話者①自身は、なるだけ早く復興という意味を込めて仮設住宅をまわって獅子舞を見せたいと思っているが、話を持ち出せないでいるという。宮崎に帰ってくるのが遅くなっても車で1時間ほどの距離であるし、仮設住宅での生活が落ち着く3年後くらいには、式年祭を行いたいと考えている。震災が起きたのだからスケジュールの変更はやむを得ないと認識している。

過去の式年祭のようす

近年では、昭和6年、昭和26年、昭和46年、平成3年に式年祭を行っている。昭和26年までは神輿の巡行を徒歩で行っていたが、昭和46年からはトラックに神輿を乗せて巡行した。また、平成3年までは浜市地区では宮崎地区の参加者は浜市の民家に、2、3名ずつ分宿していたが、平成23年はかんぼの宿に全員で泊まる予定であった。

昭和26年の日程は次のようになっていた（話者①は、千葉雄市監修・宮崎獅子舞保存会編、2004、『宮崎獅子舞』を見ながら述べる）。旧暦3月11日熊野神社を出発、12日三本木に泊まり浜市に向かう。13日浜市に到着して御潮垢離神事を行い浜市地区内を神輿が巡行する。14日浜市を出発する。15日中新田に泊まり宮崎に向かう。16日宮崎町内を巡行する。17日熊野神

社例大祭を行う。18日オユノハナなどの余興を行う。19日は休み。20日は「西部」の集落をまわる。合計15日間の日程であった。ここに記録されているように、以前の御潮垢離では、「西部」への神輿の巡行は水苗代に種まきをするような時期に行われていて、皆時々家に戻って仕事をしながらまわった。また、三本木では旅館など、宿泊する場所も決まっていた。浜市では、神輿は鹿野家の保管している臼に安置した。

昭和46年からは、徒歩ではなく、トラックに神輿を乗せて巡行した。現在は警察からの許可が下りないが、昭和46年と平成3年はトラックの荷台に神輿の守り役として2名（『熊野神社潮行事記録』によれば昭和46年は13名）が便乗した。トラックはマルイ建設のものを使用した。

平成3年は、熊野神社で神事を行った後、社殿の前で獅子舞をしてから神輿の巡行は始まる（話者①は平成3年のアルバムを見せながら説明）。松山町役場（松山町は平成18年に大崎市に合併）など、浜市まで行く行程で通る町の役場に立ち寄る。平成3年の場合は、鹿島台町役場（鹿島台町は平成18年に大崎市に合併）には立ち寄らなかった。これは当時の町長が、宗教に関係することに役所が関われないと断ったからである。そのため鹿島台町ではJAのコープ前で獅子舞をやった。浜市地区ではA氏が実行委員長として幕などを用意してしてくれた。

なお、昭和26年および昭和46年、平成3年の御潮垢離神事の記録を話者①が所有している。これらは調査者が借用している。昭和26年より前の記録も残っているが、詳細な記録ではないという。昭和46年の式年祭は、昭和26年の細かい記録が残っていたから実施することができた。

獅子舞

熊野神社の春季例大祭や式年祭で神輿が出る際には、神輿とともに宮司と獅子舞も集落をまわる。この獅子舞は、旧宮崎村のなかでも東川北の麓地区と道城地区の住民が主体になって行っている。それ以外の集落の人々は獅子舞を行わなかった。昭和59年からは熊野神社氏子が加入する宮崎獅子舞保存会を結成し、東川北以外の住民も舞手として歓迎しているが、実際には志願者は少ない。現在は50歳以上のひとが通信に獅子舞を担っている。30代のひともいるが、仕事があり参加が難しい。

保存会の前身は継承者の会といい、話者①はその代表を務めている（継承者の会は保存会内に内包され存続しているのか?）。保存会では、氏子各戸から年会費500円を集め、太鼓など用具の購入費などにあてている。保存会の会費で購入したものは集会所に保管している。太鼓は、宝くじの助成金などを使用して250万円のものを2つ購入している。

以前は年齢によって獅子舞に関わる役が異なっていた。ハタ持ち（ハタ担ぎ）・榊持ち・太刀振りの役を在学中に、獅子愛しの役を中学校卒業後に行った。太刀振りは2名である。獅子愛しの役を終えたと、笛や太鼓、獅子舞に移った。笛や太鼓は世襲ではなく、覚えてひとが就いた。獅子舞は二人一組であるが、後ろのひとよりも獅子頭を持つ前のひとが難しい。獅子舞は年齢が高くないとできなかった。獅子舞は動作が激しくテンポも重要なので難しい。

話者①は小学校4年生から中学校2年生くらいまでは太刀振りなどをし、その後獅子愛しをして、昭和25年から獅子舞を覚えた（話者の年齢と合わないため、昭和35年の聞き間違いか?）。宮崎の獅子舞は、昭和50年から昭和60年ころには宮城県の芸能大会などに出演していた。東川北の出身者以外も含まれていたが、青年団が主体であった。しかし、現在獅子舞を行っている

のは、東川北の住民だけである。

以前は春季例大祭の 20 日前くらいに屋外で獅子舞の練習を行ったが、現在は約 10 日前に社務所で練習している。

昭和 60 年からは、話者 ① ら保存会の会員 6 名が出向いて、週に 2 時間、宮崎小学校で獅子舞を教えている。これには総合的な学習の時間を活用している。総合的な学習の時間には、ほかに米作りなども行っているため、総合的な学習の時間のすべてが獅子舞の練習に当てられているわけではない。小学校での練習の様子は、東北放送や大崎タイムズ（宮城県大崎市を中心としたローカル新聞紙）からも取材を受けている。

対象は小学校 5 年生から 6 年生で、平成 23 年度は女子児童の獅子が 1 組、男子児童の獅子舞が 2 組、獅子愛しの役が女子児童 1 人・男子児童 1 人である。話者 ① によれば、児童は先輩達が獅子舞をやっているのを見ているので、自分もやらなければならないという意識ができており、やる気があるという。必要な道具は保存会の会費から毎年少しずつ揃えている。

児童の獅子舞の披露の場は年に数回ある。1 月が 6 年生から 5 年生への引き継ぎをして、3 月の 6 年生を送る会（小学校主催）で 5 年生が舞う。4 月の 1 年生を迎える会（小学校主催）で新 6 年生が舞う。その後、新 6 年生と 5 年生で練習をしていき、熊野神社の春季例大祭のときに公民館前と商工会の前の 2 カ所でも披露する。このときは児童による獅子 3 頭のほかに、山の神 3 つが出る（山の神とはなにか？）。5 月の連休のときには、加美町主催のイベントが「陶芸の里」で行われるので、これにも出演する。また、加美町文化協会主催のさなぶり大会にも出る。ほかに小学区の学習発表会でも舞う。依頼があれば、デイサービス施設や老人ホームなどでも披露している。

※引用文献・資料

「熊野神社式年祭（お潮垢離）実行委員会次第」（実行委員会資料）、2010、熊野神社氏子総代会

千葉雄市監修・宮崎獅子舞保存会編、2004、『宮崎獅子舞』、宮崎獅子舞保存会

L-4 東松島浜市地区

2012 年 2 月 7 日（火）

報告者名	木村 敏明	被調査者生年	1933（女）
調査者名	木村 敏明	被調査者属性	浜市字新田の自宅に 11 月から帰宅。
補助調査者	赤尾 智宏		

浜市地区概要

- ・字白萩は、今回の津波でほとんどの家屋が流出した。A 氏の自宅も白萩で被害を被った。
- ・字佐野は、自衛隊の飛行機が頭上を飛ぶため、その場所を運動場にすることになり、元から住んでいた人は、駅前に 10 軒、小野に 10 軒、新田に 10 軒移住した。運動場では、浜市部落の運動会、野球大会などが開かれる。
- ・字城内では、かつて田を耕したところ、たくさんの骨が出てきた。骨は津龍院の住職が段ボールに入れて回収して供養をした。骨は戦で亡くなった人の骨であり、戦が行われるような城が以前あったので、字名が城内であると話者は説明する。

震災後の浜市地区

- ・話者宅周辺の津波被害地域では 3 軒ほどしか戻ってきていない。津龍院より北側の牛網地区では、津波で住居が流出することなく、震災前と同様の住所で生活しているようである。

話者情報

- ・話者は、昭和 8 年生まれ、鹿島台出身。両親も立正佼成会を信仰していた。話者は 10 人兄弟で、兄弟 3 人が戦争に行ったが、信仰が厚かったため無事に帰ってくることができたと考えている。話者自身も熱心な信者であり、10 年間、立正佼成会の役員を務めた。23 年前に廃車置き場となっているグラウンドがある場所、字佐野から現在暮らしている字新田に引っ越してきた。2 反あった土地の 1 反を宅地とし、住居を建てた。
- ・話者は日本舞踊を習っている。指導をしてくれた先生が、津波で亡くなったが、11 月から別の先生が来て、一月に 1 度公民館で習っている。民謡、歌謡など、話者は歌うのが好きで、踊ることも好きである。3 月 24 日には浜市と牛網で歌と踊りの会があり、話者も何かやってくれと言われたので、歌を歌う予定である。

話者の被災状況

- ・石巻の佼成会の教会で被災した。激しい揺れの後、静かに水が流れ込み、教会周辺の住民と共に教会の 2 階に避難した。電気、水が通っていなかったため、食事などの生活面で不便が生じた。3 月 20 日まで教会で過ごし、避難者の食事や身の世話をした。9 日後になって、教会長に浜市まで送ってもらった。

- ・震災後、何か「頭の筋が一本くらい切れてしまった」感じがしてならない。落ち着かない。また、血圧も以前正常だったのに、熊本から来たボランティアの人に言われて測ってみたら高めになっていた。

話者宅の被害状況

- ・話者宅は土盛りをして建てられているため周囲より一段高くなっており、そのため流されなかったのではないかと。
- ・話者宅の玄関のドアが木で突き破られ、部屋内に水が流れ込んだ。
- ・布団類は泥まみれになり、衣服、ハンガーの一部は処分した。
- ・避難所、仮設住宅で過ごしていたが、7月25日に自宅の工事が始まり、11月13日からは自宅に暮らしている。仮設住宅は、風呂が小さく足を伸ばすことが出来なかった。
- ・高いところに移った方がよいとか言うが、高いところだって何が起こるか分からない。今回の津波は何千年にいつぺんのことで、「そう来るものではない」と思って今のところに住み続けている。
- ・昨年夏に仮設住宅から徒歩で自宅跡地まで移動し、自宅前の畑にトマトなどの野菜を植えて皆に分けてあげた。
- ・話者の家のホトケサン（仏壇）は震災の揺れでも倒れなかった。
- ・3月末より、釧路、札幌から2、3名、本部の栃木から3日間、立正佼成会のボランティアが来た。自宅の床板をはがして、水で流し、塩、石灰を振って乾かしてもらった。

潮垢離

- ・A氏より4代前の漁師をしていた人が、流れついたカミサマを浜市の浜でひろった。浜市は、以前漁師が多かった。カミサマを拾ったとき、太陽が昇る時のように海が赤く光っていた。A氏はすでに亡くなっており、妻も昨年の震災で亡くなった。A家は、ほとんど絶家になってしまった。
- ・昨年4月に潮垢離行事が行われる予定だったが、震災の影響でなくなった。
- ・話者は、幼い頃に祖母と共に潮垢離行事で浜市を訪れたことがある。
- ・熊野神社より、カミサマを神輿で担いで行き、小野で神輿を引き継いだ浜市の人々がA家まで運ぶ。A家にある臼の上に置く。A家の近所の人々は、臼を削り、煎じて薬としていた。その薬は、「怒り病」に効くといわれていた。
- ・震災後、宮崎町の潮垢離行事参加者が、宮崎町にある温泉に浜市の人を連れて行った。公民館の避難所にいる人たちを5回位連れて行き、話者も1回行った。
- ・宮崎町の人々は、浜市の各家に2、3名泊まり、接待を受ける。宮崎町の人には、ゴンゲンサマを大切にしてもらったという恩があるため、震災のときに助けてもらえた。

津龍院の被害状況

- ・津龍院は、客殿の西側と南側は震災で一部損壊し、床上浸水した。
- ・寺院裏にある墓地の墓石に車が2台のついていた。

東日本大震災の死者供養

- ・東日本大震災で、浜市地区では 55 名が亡くなり、1 名が行方不明になっている。
- ・来月で東日本大震災から 1 年が経ち、1 周忌である。法名をもらっていない人でも、実名でよいので供養してあげたい。
- ・話者は、東日本大震災の死者の供養を津龍院の住職にやって欲しいと思っている。「役の人」（檀家総代か？との問いに「うんそんな感じ」と答えた）に病院でたまたま会ったので話を持ちかけた。
- ・話者は、立正佼成会から、供養できる「入神」という資格を得ている。津龍院の住職から、東日本大震災の死者供養を断られた場合、自らが供養をするつもりでいる。

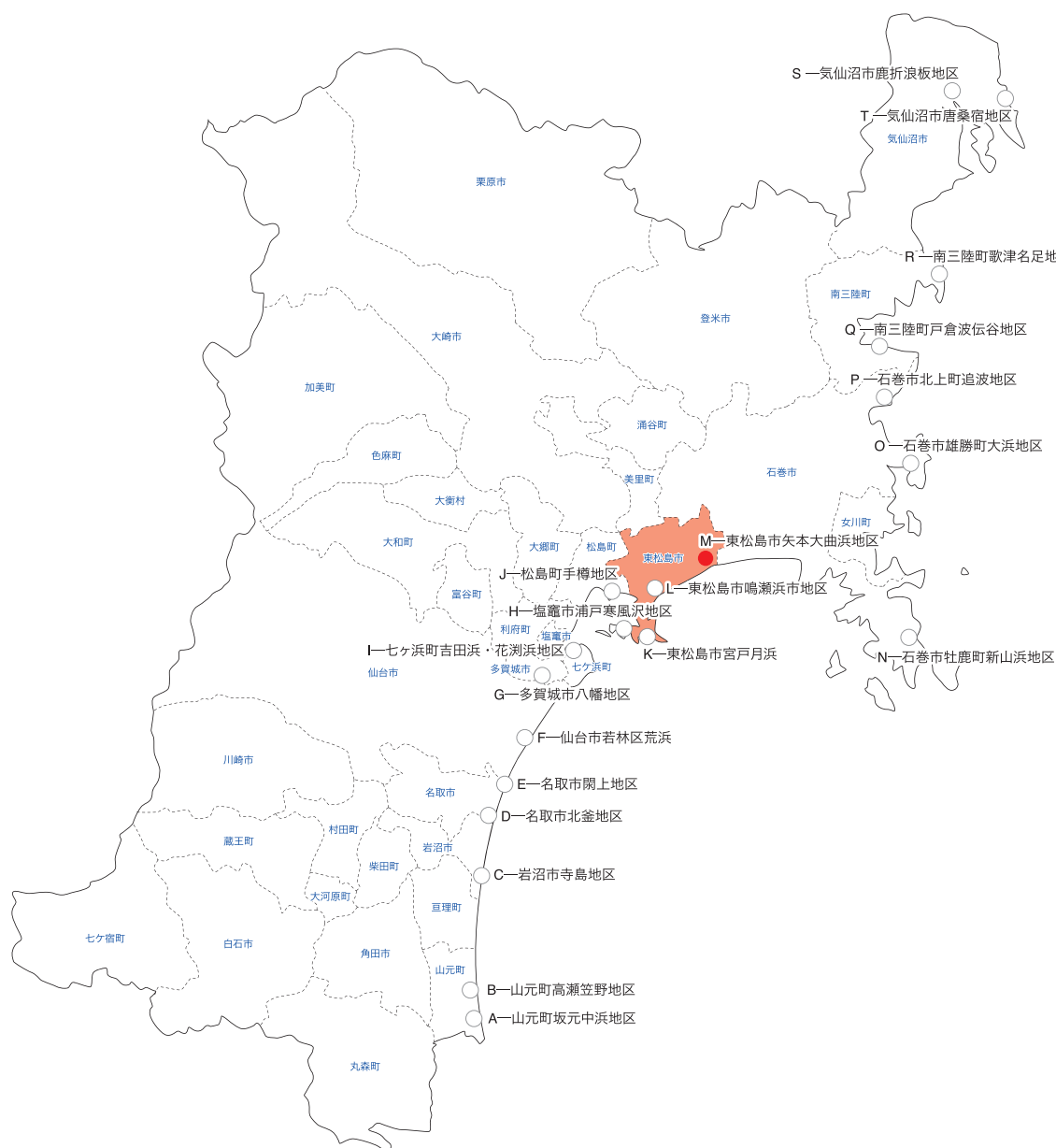
灯籠流し

- ・8 月 16 日に灯籠を小野まで持って行き、流してもらう。そのときに花火も上げる。話者の家には、立正佼成会に入っている浜市地区の人と近隣住民の灯籠が集められる。灯籠は、立正佼成会が 1 個 300 円で売っている。東松島支部で 200、小野部落で 500 ほどの灯籠が集められる。昨年を行わなかった。

正月行事

- ・元朝参りは、石上神社に行っていた。神主が 2、3 千円のお札を売っていたが、今年は無料で配られた。
- ・12 月 31 日をトシヤといい、オショウガツサマを迎える。

M-0 東松島市矢本大曲浜地区



大曲浜は、東松島市の東端、石巻市との市境を流れる定川の河口部右岸に位置する。集落の戸数は約500戸である。江戸時代は大曲村の沿岸部分の一集落である。現在も大曲浜という場合は、北上運河の海側を指す。

浜と付くように、主要な生業は漁業である。現在も養殖および地先漁業が行われている。地区が石巻市に隣接し、また仙台方面の抜け道になっていることもあり、近年では水産加工場が操業するほか、多様な事業所が開設されている。

鎮守は玉造神社がある。地区の主な行事として大曲浜獅子舞がある。1月2日に地区内から10戸ほどを宿として選び、獅子が巡航する。東松島市の指定文化財になっている。

東日本大震災では、地区のほぼ全戸が津波の被害を受け壊滅的な被災をした。東松島市の復興計画では、内陸側に集団移転が行われる予定である。

M-1 東松島市矢本大曲浜

2012 年 1 月 28 日（土）

報告者名 岡田 浩樹
調査者名 岡田 浩樹
補助調査者 岡山 卓矢

被調査者生年
被調査者属性

① 生年未確認、② 生年未確認、③ 74 才、④ 76 才
① 大曲浜獅子保存会会長・在宅介護サービス会社代表取締役、② 大曲浜獅子保存会副会長・仮設住宅自治会会長、④ 矢本在住。防衛庁の用地移転対象地になり、震災 1 年前に矢本市内に移転。齋太郎節の数少ない歌い手。

震災時、ディケアサービス会社の仕事で外にいた。震災の時に従業員の安否確認、そして顧客である高齢者の状況把握（大曲浜在住、出身者の高齢者も多い）に追われた。家族は後になったが、母親が津波にのまれた。自宅は全壊だが、その周囲の家が土台ごと根こそぎもってかれていたのにも関わらず、自分の家だけは 1 階の基礎部分と 2 階が残った。母親は 1 階にいて津波にさらわれたらしい。このように残ったのは、数年前にリフォームをしたからだと思うが、今後大曲浜は放棄されるので、今（1 月末）段階でもこうやって瓦礫や船が撤去されずに残っている（1 月 31 日にうちあげられた大型船舶は撤去）

→現場での旧大曲浜のかつての状況と被災状況の説明。

・大曲浜自体は仮設住宅の住民を中心に、矢本にまると移転する方向で話が進んでいる。しかし、他へ移り住んでいく者も多いだろう。保存会は今後若者が担うと同時に、浜を離れてしまうので、県や国の無形文化財に指定されると、今後も獅子舞を続けていくことの基盤にもなるし、また学校などで公演し、子供に教えることもやりやすくなるので、そこのところ希望する。自分たちと他のところの保存会の違いは、外を意識していること。副会長が市役所つとめなので、そういう所は心得ていて、今も外からの取材や応接の窓口になっている。意図的にメディアにも出て、大曲獅子舞の良さを知ってもらうとともに、外に出た住民にも思い出してもらい、行事にまた来てもらうなどの努力をしている。

メディアを通した獅子舞の復活

震災後の一連の獅子舞の復活についてはテレビの取材を受け、ドキュメンタリーで BS フジ（10・24）で放送され、東北放送でも 12 月 2 日に放送された。またもう一度放送する予定である（3 月 3 日 BS フジ「夢の食卓」でわかめ漁の復活を中心に番組構成）

→今回の調査では、TV プロダクション（うるるん旅行記の企画・取材プロデューサーとカメラマンが今回の調査でかなり同行）。そうした縁で石川さゆりの被災者支援 CD 録音（盆踊り歌）で、父親や話者 ④ など 5 名の齋太郎節の歌い手が東京の録音に参加した。イントロで歌っている。

ともかく情報とモノが不足し、浜は全部やられたので、まずは搜索に追われた。

大曲地区の住民は矢本運動公園とグリーンタウン矢本の被災者住宅に分かれて住んでいるが、中には個人のついでで住宅に住んでいる者もいる（会長宅）。すでに 3 分の 1 は市外に出たかもし

れない。

(東松島市大塩緑が丘、グリーントウンもとや ② & ③ 仮設住宅自治会 (入居者 300 戸、750 名)
→被災地住宅の暮らしについて現地で聞き取り (略)

獅子舞に関するほとんどの資料や、道具(獅子、はっぴ、太鼓など)もほとんど津波で流されたが、獅子舞の保存会の記録については一部水をかぶったものの、読み取れる形で書き置きが見つかった。日本財団の助成を受けて獅子人間文化財?の人につくってもらったが、やはり違う。目や顔つきがこっちで作ったものと違う。この獅子は東京で公演するときに使うことになっている。太鼓は玉造神社に置いてあったが、神社も流され、まったく別のところで見つかった。はっぴなどを財団の助成で作ったことは大きい。

今の獅子舞い保存会の仮事務所(矢本市内)は普段は誰も住んでいないが、ここに獅子頭、太鼓やはっぴなどを置いてあり、また前後打ち合わせなどや行事の前に集まったり、ちょっとした飲み会はできる。ただし普通の家なので、いつまでもいるわけにいかない。

練習は別の場所で行っている。

→仮事務所での若い衆からの聞き取り (略)

生業(漁業)の変遷と獅子舞(保存会結成以前)

50 年前は、トロール、ケーソン漁が盛んで大曲の漁師は豊かだった。漁場はこの付近だけでなく、津軽や北海道まで出漁した。当時は獅子舞は正月明けの大きな行事で、家々は障子や戸を開け、縁側に塩をまいて待っていた。獅子舞は家の中でも舞うのだが、皆酒を飲んでいるし、へたすると、戸や障子をぶち抜いたり、壊すこともあった。獅子舞でもっとも力があるのは獅子を持ち上げる時に人を持ち上げる役で、こうした者は厄年や婿で来た者が力試しや、厄払いなどの目的でなった。一軒あたり、30 分、20 名から 30 名がやってくるのだから、ものすごく賑やかだった。やってきた者にはオショマツ(ふるまい)でもてなした。オショマツの内容は刺身や魚、きんぴらごぼうなど。

当時、若者は飯炊きから入り、漁を覚えると、徐々に役が上がった。船主は別にいて、大曲の者は当初は大曲の船主の船で働いたが、やがてトロールが禁止され、遠くに出るようになると、他所の船に乗るようになり、北海道(根室根拠地)の鮭(ケーソン)だと、あちらこちらのものと一緒に仕事をした。遠くに行けば行くほど、浜に戻るのは正月くらいしかなくなってくる。その当時がやはり故郷に帰ってきたというので獅子舞がもっとも盛んだった時期ではないか(昭和 30 年代: 現会長はその当時には生まれていない)

村の組織と相互扶助

大曲は 30 組に分かれていた。震災前は浜区の委員会と漁協が中心。またかつて 3 軒一組で組になって葬式など、助け合った。契約講は 14 組あったが、近年解散が相次いでいた。講長と会計、監査。獅子舞いも契約講式でやっていて、暮れの 20 日に総会が行われ、講長が引き継がれた。新しい講長は獅子を床の間に飾り、「宿わたし」をする。

*今は 8 月の 13 日に総会。

漁業に関するタブー

ヘビと言ってはならない。「ながもの」という。船神（オフナダさま）を祭った。やはり女性特に生理中の女性や妊娠中の女性は近づいてはならなかった。

生業の変化と獅子舞いの衰退

大曲浜の獅子舞は、かつては（昭和 30 年代まで）休漁期の若者が正月の 1 月 20 日に行う行事として盛んに行われていた。正月の行事は家々でして、一呼吸置いての行事。家々を訪ね、振る舞いを受けながら、酒を飲みつつ、次の家へ向かう。人によってはそこで腰を落ち着けて飲むものもあり、入れ替わり立ち替わりで、近所や知り合いが舞うことすらあった。舞い方は一応の型はあったが、舞手によって自由で、まずは勢い（勇壮さ）が好まれた。血気盛んな若い衆の行事だったので、喧嘩や少しの不作法も許される「無礼講」であった。時には知り合いのつてをたどって、「やくざ」が獅子舞に加わることもあり、問題にもなった。特に練習をすると言うより、小さいときから毎年見聞きしたり、やっているうちに自然と覚えていった。齋太郎節は飲み会になると必ず唄われるので、獅子舞以外にも特に青年団などの集まりの中で覚えていった。

第 1 の転換期

昭和 40 年代には漁業が衰退傾向に向かうとともに、若者は浜の外に働きに行くようになった。とともに、石巻などにつとめに行く者も増えた。このため、漁業暦・村の年中行事と生活の間に乖離が生まれ、1950 年代には獅子舞いは次第に停滞、形骸化しかかっていた。ところが第一の大きな転換は、昭和 32 年の東北博覧会。そこに出ることになり、少しはきちんということとで、練習などもしたそれから学校の行事などにも出るようになり、テレビに出演するようになった。この受け皿として愛好会、同好会が大きな役割を果たす。

昭和 48 年に愛好会が発足。昭和 54 年に保存会になった。地区住民だけで構成。

初代会長は熱海吉郎。会長の父親は 3 代目の会長。保存会の構成は世代がかなり影響している。70 代はかつて大曲浜が漁業で栄えた時期の獅子舞を担った世代。その後漁業が低調になっていくにつれて、世代交代がうまく進まず、再び停滞し、その後現在の体制になって再び活動が活発になりかかったところで震災を迎える。

第 2 の転換期

大曲浜の獅子舞は震災後活発に活動しているが、その中心は、40 代の会長、副会長である。この 2 人は、会長が前職がトラックの長距離運転手で現在は訪問ディ・ケアの会社社長。副会長は市役所勤務である。この 2 人は高校の先輩後輩で、若者を集め、一度停滞した同好会を震災前に「復活させ」た。この際に大幅な世代交代を進め、「きちんとした長老」から教えを受けつつ、実際には保存会として、地域住民のために、地域住民のシンボルとして再々出発がはかられ、現在にいたる。これが第 2 の転換期。

今の中核を占める 30 代の役員は中学校の時の文化祭で獅子舞をするようになり、そのメンバーを中核に立て直した。主な行事は正月の獅子舞と結婚式などの披露宴で舞う。最近は知り合い

から祝いの席に招かれることも多い。

→自動車中古販売会社の創立 10 周年の際に公演(1月 28 日)。この際には、獅子舞だけでなく、主に会員の子供(女の子が中心)が舞いをまっした。開催者からの祝儀、出席者の祝儀、そして主食が振る舞われる。

獅子舞だけでなく、齋太郎節、さらには子供の舞いもセットにしてやっている。この子たちは、16-7 年前から獅子舞いを中学校で教え始めたが(中学校全体ではなく、公民館で大曲浜の子供を対象に)、やはり今の時代を考えると女子の部分がよかった方がよいので、加えるようになったことを引き継いでいる。

- ・食生活: なかじ焼き: ひじきを油で揚げて、小麦、砂糖、塩で味付けした卵焼き。浅蜆を入れたりもした。故郷の味と言えば、海苔。
- ・齋太郎節。現在の 70 歳以上は青年団やいろいろな飲み会で歌うのでそれで覚えた。唄ったのは浜甚句やソーラン節(後に北海道への出漁も増えたので)そしてタントウ節。齋太郎節は浜甚句を基調にしているが、基本的な節や拍子は同じだが、即興で唄うのが基本だった。名人という歌い手はいた。どこが違うとは言いにくいだが、声だけじゃなくて、歌詞や節回しなど微妙に普通の歌い手と違う。「味がある」「味がない」というのが評判になる。

2011 Fiscal Year Report of Documentation Project for the Folk tradition and Intangible culture in
Tsunami-suffered region of Miyagi Prefecture, Vol. 4

by Great East Japan Earthquake

[Higashi nihon daishinsai ni tomonau hisai shita minzoku bunkazai chosa 2011 nendo hokokusyu.
Miyagi ken chiiki bunka isan purojekuto, Heisei 23 nendo bunkacho "Bunka isan wo ikashita kanko
shinko, chiiki kasseika jigyo"]

Edited and published by Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University,
41 Kawauchi, Aobaku, Sendai, 980-8576, Japan

Editor-in-chief: Hiroki Takakura

Date: 30 March 2012, Design: Sasaki Printing and Publishing CO., Ltd

東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2011 年度報告集（第 4 分冊）
宮城県地域文化遺産復興プロジェクト
（平成 23 年度文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」）

編集・発行：東北大学東北アジア研究センター
〒 980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

監 修：高倉 浩樹

発 行 日：2012 年 3 月 30 日

製 作：笹氣出版印刷株式会社
